

東亞局

第三號

公普通第一四九號

昭和十一年十月十九日

在白城子

分館主任 乾

重

外務大臣 有田 八郎 殿

昭和十一年十月十九日附在滿大仰宛 普通

第二九八號寫送付

件名

一 滿鐵農事試驗場押木營子分場概況報告ノ件

在鄭家屯日本領事館白城子分館  
齊々哈爾

普通第二九八號

昭和十一年十月十九日

在白城子

分館主任 乾

重 雄

在滿洲國

特命全權大使 植 田 謙 吉 殿

滿鐵農事試驗場押木營子分場概況報告ノ件

滿鐵ニ於テハ公主嶺農事試驗場分場トシテ管下興安南省西科前旗押木營子所在ノ土地約七千陌ヲトシ牛馬改良試驗場ヲ開設スルコトトナリ豫テ事務所及畜舎ノ建造ニ着手中ノ處今般右落成ヲ見タルヲ以テ十月九日蒙政部及馬政局其他各關係方面ヲ招待シ現地ニ於テ盛大ナル開場式ヲ舉行愈々本格的ニ蒙古牛馬ノ改良試驗ニ乗出スコトト

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

E-1910

0252

ナレルカ同分場ノ概況御参考迄別紙ノ通報告申進ス  
本信寫送付先 外務大臣

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

滿鐵農事試驗場押木營子分場概況

沿革概要

滿鐵は大正二年公主嶺に農事試驗場本場を創設するに際し、畜産科を設け滿蒙の家畜改良各種試験を行ひ幾多の行績を残したるが牛馬の如き大家畜に至りては之が放牧地域なく、爾來、馬にありては時の内閣指令により大正八年度産場試驗場設立の豫算を計上せしも、當時滿洲に於ける政情は之が用地獲得を許容せず幾多の接渉も效を空うせり。その後昭和二年大鄭線白市附近に一中國人と牝馬預托契約を締結し蒙古種牝馬二〇〇頭を收容して試験開始の途につきたるも又も滿洲事變勃發し事業中斷せしが滿洲國政府成立し國內に馬政局制布かるゝに伴ひ滿鐵は馬匹改良の試験方面

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

E-1910

0253

のみを擔當する事となれり。牛にありては昭和四年奈曼旗大倉組農場に蒙古種牝牛及短角種を入れて蒙古牛改良試験を開始せるも之亦滿洲事變のため事業中斷して試験動物は一時大鄭線歐里に收容せるもその後滿洲國內の治安徐々に平靜に歸したる時、偶々滿洲國政府より白溫線王爺廟を距る北に一七軒の地、押木營子附近に約七千陌を無償貸與をうけ昭和九年十一月夫々假收容中の試験動物を移管して札薩克圖牛馬試験地なる假名稱の下に事業を開始し、昭和十一年四月一日事務所及畜舎の一部完成と共に押木營子分場と改稱し愈々本格的に蒙古牛馬改良試験の途につけり。

位置地勢及氣象

興安南省西科前旗押木營子（王爺廟の北約十七軒）  
北緯四六度一六分 東徑一二二度〇七分 海拔二八〇米

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

大體南北兩面の緩傾斜を有する谷間にして西は洮兒河の滯流に望み土性は埴土内至埴壤土にして表土一―四米に及び地下水高からず。放牧地はシバムギモドキ、ホツスガヤを主とし草質概して可良なり。

土地及建物

總地積

約七、〇〇〇陌

耕作地（本年度）

八〇、五陌

庶務係及馬匹改良係院子

一七五<sup>M</sup>×二八〇<sup>M</sup>

畜牛改良係院子（第一次）

一一五<sup>M</sup>×一三五<sup>M</sup>

建物

二九棟

本分場は試験動物の増加につれ漸次建物を増築完成するものにして馬匹改良係にありては六箇年繼續事業として認可せられたるも

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

のにして本年度は第二年度にあり大體基礎牝馬二〇〇頭及駒は明  
 五歳迄繋養する迄の厩舎を有するを以て完成するものにして畜牛  
 改良係に於ては本年度を以て第一次建築を終り來年度より曠の自  
 然増加及試験項目の増加により第二次事業として三箇年繼續事業  
 費豫算提出中にてこの認可を俟つて大體完成するものなり。

四場員			
技師(兼)	一名	日本人傭員	八名
技術員	三名	滿洲人傭員	四名
雇員	二名		
繋養家畜頭數			
種牝馬及試情馬			
	アラブ種	二	
	ギドラン種	二	

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

基礎牝馬	八四	蒙古種	二
當歲駒	四五	試情馬	二
二歲駒	二四		
三歲駒	三〇		
四歲及五歲駒	一〇		
使役馬	二九		
計	二三〇		
種牝牛	七	角種	七
基礎牝牛	一六〇	古種	二
當歲	一一五		

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

二	歳	六五
三	歳	四七
四	歳	四
使役牛		七
計		四〇七

六 事業概要

1 馬匹改良係

大體に於て滿洲國軍政部馬政局の滿蒙馬匹改良計畫に則り、蒙古種に對しアラブ種及アングロアラブ種（ギドラン種を含む）を種牡馬として大體體高一、四五米を標準とし體軀之に伴ふ乘輓兼用の小格改良種の作出を主眼とし之に關聯する各種試験を遂行せんとす。本分場は未だ開設當初にして建設途上であり、現在の設

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

備を以て各種試験遂行不可能なるも本年度着手實行しつつあるもの次の如し

一 蒙古馬改良試験

(イ) 蕃殖試験

(ロ) 駒發育試験

(ハ) 能力試験に關する豫備調査

二 研究並調査事項

(イ) 蒙古馬の形態學的研究

(ロ) 蒙古種牝馬の發情型に關する研究

(ハ) 滿洲在來蹄鐵に關する調査

尙將來實施すべき試験として主なるものは各種牛産駒の力役能力試験にして乘輓兩役に對し主として物理的乃至力學的に能力を

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

E-1910

0256

測定し併せて運動生理的檢定を行ひ且つ體型と能力との相觀を考慮して原種と作製種との能力を明かにし改良種の固定を證明せんとするものなり。

三、飼料作物の試作並栽培

本地方に於て飼料作物として栽培可能見込の穀類牧草類及根菜類の試作並に栽培をなし又牧野改良の直接手段として排水、植樹、道路計畫をたて併せて農牧に必要な氣象觀測をなす。本年度耕地面積は八〇・五陌なり。

四、牛馬衛生に關する事項

蒙古地方に流行する傳染性、非傳染性の牛馬疾病に對する治療並に之が防遏法に就て研究し併せて家畜衛生狀態に關する試験調査をなす。

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

11 畜牛改良係

蒙古牛改良に對しては種牝牛として短角種を供用し乳肉役能力に優れたる改良固定種の作出を主眼とし併せて畜牛に關聯する各種試験を遂行せんとす。開設當初の設備に於て本年度實行しつゝあるもの次の如し。

蒙古牛改良試験

イ、繁殖力比較試験

ハ、體型比較試験

ロ、發育比較試験

ニ、一般性狀比較試験

尙將來設備の漸次完成するに従ひ遂行せんとする試験の主なるもの次の如し。

イ、體質試験

ホ、肥體、屠殺及肉質試験

ロ、習性試験

ヘ、育成及飼養經濟試験

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

ハ、産乳能力試験  
ニ、力役能力試験

ト、牝牛及去勢牛の各種性状  
比較試験

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

滿鐵農事試験場押木營子分場概況

一、沿革概要

滿鐵は大正二年公主嶺に農事試験場本場を創設するに際し、畜産科を設け滿蒙の家畜改良各種試験を行ひ幾多の行績を残したるが牛馬の如き大家畜に至りては之が放牧地域なく、爾來、馬にありては時の内閣指令により大正八年度産場試験場設立の豫算を計上せしも、當時滿洲に於ける政情は之が用地獲得を許容せず幾多の接渉も效を空うせり。その後昭和二年大鄭線白市附近に一中國人と牝馬預托契約を締結し蒙古種牝馬二〇〇頭を收容して試験開始の途につきたるも又も滿洲事變勃發し事業中斷せしが滿洲國政府成立し國內に馬政局制布かるゝに伴ひ滿鐵は馬匹改良の試験方面

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

のみを擔當する事となれり。牛にありては昭和四年奈曼旗大倉組農場に蒙古種牝牛及短角種を入れて蒙古牛改良試験を開始せるも之亦滿洲事變のため事業中斷して試験動物は一時大鄭線歐里に收容せるもその後滿洲國內の治安徐々に平靜に歸したる時、偶々滿洲國政府より白溫線王爺廟を距る北に一七籽の地、押木營子附近に約七千陌を無償貸與をうけ昭和九年十一月夫々假收容中の試験動物を移管して札薩克圖牛馬試験地なる假名稱の下に事業を開始し、昭和十一年四月一日事務所及畜舎の一部完成と共に押木營子分場と改稱し愈々本格的に蒙古牛馬改良試験の途につけり。

ニ位置地勢及氣象

興安南省西科前旗押木營子（王爺廟の北約十七籽）  
北緯四六度一六分 東經一二二度〇七分 海拔三八〇米

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

大體南北兩面の緩傾斜を有する谷間にして西は洮兒河の清流に望み土性は埴土内至埴壤土にして表土一―四米に及び地下水高からず。放牧地はシバムギモドキ、ホツスガヤを主とし草質概して可良なり。

ニ土地及建物

總地積

約七、〇〇〇陌

耕作地（本年度）

八〇、五陌

庶務係及馬匹改良係院子

一七五×二八〇<sup>M</sup>

畜牛改良係院子（第一次）

一一五×一三五<sup>M</sup>

建物

二九棟

本分場は試験動物の増加につれ漸次建物を増築完成するものにして馬匹改良係にありては六箇年繼續事業として認可せられたるも

在齊々哈爾日本領事館白城子分館



のにして本年度は第二年度にあり大體基礎牝馬二〇〇頭及駒は明  
 五歳迄繋養する迄の厩舎を有するを以て完成するものにして畜牛  
 改良係に於ては本年度を以て第一次建築を終り來年度より牝の自  
 然増加及試験項目の増加により第二次事業として三箇年繼續事業  
 費豫算提出中にてこの認可を俟つて大體完成するものなり。

種牝馬及試情馬	ア ラ ブ 種	二	二
	ギ ド ラ ン 種	二	二
繋養家畜頭數		二	名
技 術 員		一	名
技 師 (兼)		一	名
雇 員		三	名
		四	名
		八	名
		八	名
		四	名
		二	名

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

當 年	一	一	五
基 礎 牝 牛	一	六	〇
種 牝 牛	二	七	〇
種 牡 牛	二	三	〇
計	二	三	〇
使 役 馬	二	九	
四 歲 及 五 歲 駒	一	〇	
三 歲 駒	三	〇	
二 歲 駒	二	四	
當 年 駒	四	五	
基 礎 牝 馬	八	四	
試 情 馬	二		
蒙 古 種	二		

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

E-1910

0250

六 事業概要

1 馬匹改良係

大體に於て滿洲國軍政部馬政局の滿蒙馬匹改良計畫に則り、蒙古種に對しアラブ種及アングロアラブ種（ギドラン種を含む）を種牡馬として大體體高一、四五米を標準とし體幅之に伴ふ乘鞍兼用の小格改良種の作出を主眼とし之に關聯する各種試験を遂行せんとす。本分場は未だ開設當初にして建設途上にあり、現在の設

二	六五
三	四七
四	四
使役牛	七
計	四〇七

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

備を以て各種試験遂行不可能なるも本年序着手實行しつつあるもの次の如し

一 蒙古馬改良試験

(イ) 蕃殖試験

(ロ) 胸發育試験

(ハ) 能力試験に關する豫備調査

二 研究並調査事項

(イ) 蒙古馬の形態學的研究

(ロ) 蒙古種牝馬の發情型に關する研究

(ハ) 滿洲在來蹄鐵に關する調査

尙將來實施すべき試験として主なるものは各種牛産駒の力役能力試験にして乘鞍兩役に對し主として物理的乃至力學的に能力を

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

測定し併せて運動生理的檢定を行ひ且つ體型と能力との相觀を考慮して原種と作製種との能力を明かにし改良種の固定を證明せんとするものなり。

≡飼料作物の試作並栽培

本地方に於て飼料作物として栽培可能見込の穀類牧草類及根菜類の試作並に栽培をなし又牧野改良の直接手段として排水、植樹、道路計畫をたて併せて農牧に必要な氣象觀測をなす。本年度耕地面積は八〇・五陌なり。

四牛馬衛生に關する事項

蒙古地方に流行する傳染性、非傳染性の牛馬疾病に對する治療並に之が防遏法に就て研究し併せて家畜衛生狀態に關する試験調査をなす。

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

11畜牛改良係

蒙古牛改良に對しては種牝牛として短角種を供用し乳肉役能力に優れたる改良固定種の作出を主眼とし併せて畜牛に關聯する各種試験を遂行せんとす。開設當初の設備に於て本年度實行しつゝあるもの次の如し。

蒙古牛改良試験

イ、蕃殖力比較試験

ハ、體型比較試験

ロ、發育比較試験

ニ、一般性狀比較試験

尙將來設備の漸次完成するに従ひ遂行せんとする試験の主なるもの次の如し。

イ、體質試験

ホ、肥體、屠殺及肉質試験

ロ、習性試験

ヘ、育成及飼養經濟試験

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

ハ、産乳能力試験  
ニ、力役能力試験

ト、牝牛及去勢牛の各種性状  
比較試験

在齊々哈爾日本領事館白城子分館

E-1910

0253

發信用執務用		
主信	1	2
附甲	1	2
附乙		
附丙		
附丁		
備考		

記  
案

昭和十一年十月十五日附在トビニ村井總領事來信  
公第四三五号寫修正通作成附屬書ト共ニ添附  
ノコト

公 信 案

外 務 省

文書課發送 昭和拾壹年十月九日發送済 淨書	正校(原稿) 昭和一十一年十一月 (淨書)	通三 普通通第 四八七號 昭和拾壹年十月九日 日附 附屬 有 大正 日起草 水	主 任 通商局長 第三課長	受 信 人 名 細井農林畜産局長	發 信 人 名 松嶋通商局長	記 録 件 名	本件ニ關シ在トビニ村井總領事ヨリ別紙寫ノ通リ申越 タル付右翰ニ送付ス 附屬書添付ス	公 信 案	外 務 省
-----------------------------	-----------------------------	---	---------------------	---------------------	-------------------	---------	---	-------	-------

文書課長  
附屬物同封

別紙

附屬物同封

通三  
11.11.6  
受局

6 193

E-1910

0264

昭和三十二年十月十五日附在トニー村井總領事來信  
 公第四三九号寫修正通作成附屬書上共作紙添附  
 外務省

發信用執務用			
主信	1	1	2
附甲	1	2	2/
乙			
丙			
丁			
備考	EX. 3. 2. 8		

文書課長 林 昭三

文書課發送 昭和拾壹年十一月九日發送済

主 通商局長 了

主 第三課長 了

通三機密 第二六八七號 昭和拾壹年二月六日 日附 附屬 有

淨書 〇

正校(原稿) 〇 (淨書)

昭和三十二年十一月九日起草

受 信 人 名 鞠町區丸好二二日本工業復興部  
 阪谷日溪協會會頭

名 件 錄 記 高 野 幸 怡

名 人 信 發 松嶋通商局長

本件關在トニー村井總領事より別紙寫し通申越え付  
 (附屬書添附)  
 右類を送付ス

外務省

別紙  
 附屬物同封  
 11.11.6  
 受付

6-194

E-1910



通商局

類E 4. 3. 2. 8

東亞局

公普通第八九七號

昭和十二年五月二十四日

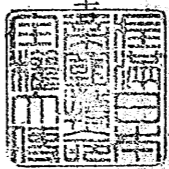
在滿洲國

特命全權大使 植、田 謙

外務大臣 佐藤 尚武 殿

「哈爾濱ヲ中心トスル活牛及活豚ノ需給竝ニ飼養現況ニ關スル調査」送付ノ件

滿鐵北滿經濟調査所作成ニ係ル標記資料御參考迄一部送付ス



昭和十二年五月廿九日接受

在滿日本帝國大使館

E-1910

0266

昭和十二年四月十五日  
北滿經濟資料第五二號

哈爾濱ヲ中心トスル活牛及活豚ノ需給  
並飼養現況ニ關スル調査

滿鐵・北滿經濟調査所

凡例

北滿ハ中央畜産資源ノ培養地帯トシテ一般ニ識ラルルトコロナルカ  
五箇年計畫ニ伴フ農畜産部門ノ開發促進或ハ畜産加工企業ノ實施計畫  
或ハ北滿都市ニ於ケル人口ノ激増ニ直面スルニ及ヒ、勞役家畜、乳肉  
用畜ノ需要ハ頓ニ増大シ供給之ニ伴ハサルノミカ、其ノ資質ノ向上  
ハ必然的要求トシテ當面シテ居ル。

當所ハ茲ニ其ノ現狀ヲ取敢エス哈爾濱ヲ中心トシテ牛、豚ニ對シ究  
明シ、此ノ種企劃ニ呼應セシムヘキ今後ノ課題ニ備ヘタ次第テアル。

擔當者 飯島昇

昭和十二年四月十五日

滿鐵・北滿經濟調査所

E-1910

0267



序

近時北滿特ニ哈爾濱市ニ於ケル食肉ノ拂底ハ等閑シ得サル問題ニシテ之カ資源ノ培養ニハ先ツ需給ノ現狀並飼養狀況ヲ瞭カニスル必要カアル。尙本年度ヨリ開設サル畜産加工所ノ經營ニ對シテ使用原料ノ調達上ニモ之カ必要上調査セルモノテアル。

二 本調査ハ總テ既存資料ニ依テ作成セルモノテアル。

三 調査ニ當リ左記各機關ヨリ種々資料及指教ヲ賜リシヲ以テ此處ニ深謝ノ意ヲ表スル。

哈爾濱特別市公署衛生科及農政科

濱江省公署實業廳農務科

哈爾濱鐵路局產業處畜產科

昭和十二年四月十五日

哈爾濱ヲ中心トスル活牛及活豚需給關係並飼養ノ現況

一	活牛及活豚需給關係	一	一
1	取 引 機 關	一	一
2	出 廻 狀 況	一	一
3	産地別出廻狀況	一	一
4	月別出廻狀況	一	一
5	運輸機關別出廻狀況	一	一
6	種類(年齢、性)別出廻狀況	一	一
7	取 引 價 額	一	一
8	屠 殺 數 量	一	一
9	活牛及活豚ノ品質ニ就テ	一	一
10	輸送其ノ他ノ經濟的考察	一	一
(a)	鐵道ニ依ル場合	一	一
(b)	陸路趕送ニ依ル場合	一	一

二	哈爾濱附近飼養狀況	二	二
1	飼養概況	二	二
2	飼料	二	五
3	飼養頭數	二	〇
4	生產頭數	三	三
5	家畜疾病	三	四
三	改良増殖計畫及其ノ機關	一	一
1	哈爾濱鐵路局產業處畜産科	一	一
2	濱江省公署實業廳農務科	一	八
3	哈爾濱特別市公署農政科	一	一
四	要約	一	一
附	参考文献	一	五

一 哈爾濱ヲ中心トスル活牛及活豚需給關係

哈爾濱カ北滿ニ於ケル家畜ノ消費市場トシテ年々移入サレル數量ハ莫大ナルモノテアル。之ヲ康徳三年度一箇年間ニ就テ見ルモ、牛約六萬頭、豚六萬頭ニ達シテ居ル。之等出廻家畜ヲ産地別ニ見ルト畜牛ニ於テハ北滿各地ハ勿論遠ク北支方面ヨリ輸入サレテ居ルカ主要産地ハ海拉爾ヲ中心トシタ呼倫貝爾一帶ニシテ哈市需要高ノ五〇%餘ヲ占ムル現狀テアル。

之ニ次キ濱江、龍江各省農耕地帯ヨリ老廢牛トシテ出廻ルモノテアル。

活豚ハ哈爾濱ヲ中心トシタ濱江省内各地ヨリ大半出廻ツテ居ルカ、之等ハ所謂北滿ニ於ケル養豚カ自給自足ノ建前上、生産豚ノ大部分ハ自家消費ニ充當サレ、農家ノ餘剩部分トシテ出荷サレルモノテアル。詳細ニ亘ツテハ以下項ヲ追テ述ヘルコトトスル。

1 取引機關

家畜ノ取引ハ從來當地ニ於ケル相當資本ヲ有スル牛馬商カ各自個々

3

省	江 濱							哈爾濱	地 別	畜 數			
	滿	蒙	拉	西	望	蘭	濱			五	封	阿	雙
	滿	東	林	崗	奎	西		常	山	城	城	二、五〇三	一、二五二
	一〇	二	二	一	一	一	五	三	三	三	四	一	三
	二	五	〇	八	一	六	八	一	一	〇	〇	三	九
	三、二六八	四、二〇〇	九、一〇九	一、七〇九	一、二三二	七、二二五	五、二三七	一、〇三九	二、二一五	七、四九七	五、八二五		

4 埠別出廻状況

2

今出廻状況ヲ産地別、月別、運輸機關別種類（年齢、性別）別ニ分類シテ見ルト次表ノ如シ。

2 出廻状況

ハ爾濱ニ出廻ル畜牛及豚ハ總テ地場ニ於テ屠殺消費セラルルモノテアル。故ニ一時肥育ノ目的ヲ以テ飼養サレルコトヲ極ク短期間ニシテ、之ヲ畜牛ニ於テ見ルニ農耕、運搬ニ使用サレルコトハ殆トナイ。

ニ大益買付ヲナシ適時需安ニ應ジテ賣却シテ居ツタ様ナ状態テアルカ、之ヲ其ノ幣ニ放任シテ置クコトハ人畜ノ衛生並防疫上ノ見地ヨリ種々障碍ヲ來ス懼アルヲ以テ、其ノ統制ノ必要上康徳二年二月哈爾濱特別市公署ハ家畜交易市場ヲ設ケテ如上ノ衛生並防疫施設ノ完備ト取引ノ圓滑合理化ヲ圖リ順次改善ヲ加ヘラレタル結果現在ニ於テハ家畜ノ取引ハ總テ家畜交易市場ニ於テ行ハレツツアル。



5

嶺 扎 蘭 屯	安 滿 洲 里 石	興 牙 克 爾	與 扎 爾 拉 爾	省江龍						計	省林吉 計其	產 地 別	畜 數			
				計	其	洮 突	拜 泉	洮 安	龍 泰 來				洮 南	牛	豚	
三	一	一	五	二	一	四	一	六	一	四	三	四	三	九	一	八
一	九	二	二	〇	二	四	七	六	一	三	九	八	一	二	一	九
三	九	七	五	〇	一	八	一	四	八	〇	一	八	一	〇	〇	一

4

省林吉 扶 餘	三 河 樹	計	省江						濱	產 地 別	畜 數			
			其	石 城	肇 源	慶 城	安 達	海 倫			呼 蘭	樂 鎮	綏 化	巴 彥
一	七	二	一	一	四	九	四	一	一	四	一	一	五	四
八	二	四	八	九	七	三	二	四	一	二	三	四	一	三
二	六	四	七	〇	一	一	六	三	六	三	二	九	一	五
六	三	七	一	七	〇	三	四	八	一	九	四	三	四	一

E-1910

0201

合 計	中 國		熱 河 省 承 德	奉 天 省 地 區	錦 州 省		三 江 省	興 安 省				畜 牛 量	
	北 支	山 東			計 其 他	計 其 他		遼 寧	綏 遠	察 哈 爾 蘇 聯	王 爺 廟		
一、九、五、七、五	一、七、七	二、一、二	二、四	一、一、一	五、五、五	八、一	四、七、四	一、九、七	一、〇、八、五、七	三、〇、一	七、五、五	二、五、九、〇	八、四
六、一、八、〇、三	1	1	1	1	1	1	1	四、三	1	1	1	1	1

備考 1 哈爾濱特別市公署資料ニ依ル。  
2 康德三年一箇年間

以上ノ表ニ依テ見ルモ、曠カナル如ク畜牛ニ於テハ興安省就中海拉爾、開魯、牙克石等カ主要ナル産地テアリ、哈爾濱市ニ需要高ノ半數以上ヲ占ムル現状テアル。然ルニ豚ニ於テハ特別市及哈爾濱ヲ中心トシタ瀋江省内近接縣ヨリ大半出廻ツテ居ル。

月別出廻狀況

康德三年一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	畜 牛	豚
二、〇、八、二、頭	一、〇、六、四	一、三、七、四	一、二、八、〇	一、二、八、六	一、〇、七、四	一、一、一、二	一、四、〇、五	一、七、九、二	七、二、〇、九、頭	三、一、一、九
										三、七、一、七
										四、四、一、三
										五、四、八、五
										五、四、三、三
										四、六、五、六
										五、一、三、六
										五、八、九、四

E-1910



一〇月	二五五六	五三二五
十一月	二〇五九	五一七四
十二月	二二九一	六二四二
計	一九五七五	六、八〇三

備考 哈爾濱特別市公署資料ニ依ル。

右ノ表ニ從ヘハ畜牛ハ八月頃ヨリ順次増加シテ翌年一月ニ至ル六箇月間カ一年ヲ通シテ出廻リノ最盛季テアル。此ノ傾向ハ豚ニ於テモ同様ニシテ冬季カ比較的多ク需要セラルルモ、一般ニハ正月、五月、八月ノ三大節ニ殊ニ増加スルヲ例トスル。此ノ時期ニハ滿洲國入ノ各階級ヲ通シテ豚肉ヲ著ルシク使用スル爲出廻狀況モ畜牛ノ如ク顯著テハナク大體一年ヲ通シテ平均シテ居ル様テアル。

ハ 運輸機關別出廻狀況

畜牛ニ就テ見ルト出廻總數一九五七五頭内鐵道ニ依ルモノ一四八九五頭、陸路四五六一頭、水路一一九頭トナツテ居ル。即チ總數ノ七六%迄ハ鐵道ニ依リ移入サレ、殘餘ノ陸路ニ依ルモノハ主トシテ

8

特別市内ノ乳牛及濱江、吉林兩省ニ於テ農耕ニ使用サレタル後老廢牛トシテ出廻ツテ居ルモノテアル。  
豚ニ於テハ出廻總數六一、八〇三頭内鐵道ニ依ルモノ三一、二七八頭陸路三〇、五二五頭ニシテ略半シテ居ル。今產地別ニ見ルト鐵道ニ依リ主トシテ出廻ル地方ハ雙城、海倫、滿溝、綏化、對青山、拜泉ニシテ、陸路ハ特別市、阿城、呼蘭、濱、巴彥、西崗、肇州ノ諸地方テアル。

ニ 種類、年齢、性別出廻狀況

a 畜牛

年種 齡別	洋種		雜種	
	牝	計	牝	計
三才才未滿	八九二七〇	一、五九八	六七	九九
四才以上八才未滿	五六八一〇	六八四一	二五七	二五七
九才以上十五才未滿	一六六	一九七	三五	六六
十六才以上	一〇三	一〇二	二	二
計	一、七二八	八、三五一	一、三三八	八、二九六

9

年種 齡別	在			來			種 計	合			種 計
	牝	牡	牝	牝	牡	牝		牡	牝	牡	
四才以上	六六二	四九一	一八三	一、三三六	五八四	二九六	二四七	三、一六四			
八才未滿	一、六六四	六四六	六、二四〇	八、五五〇	三、三四六	〇一一	六五〇五	九、八六二			
九才以上	四四二	八七	四、八八七	五、四一六	六六三	三三四	五三三三	六、三五〇			
十才以上	!	!	一一	一一	一〇四	四二	五三	一九九			
計	三、七六八	二、二四一	一、三二一	一五三一	三、四六九	二、六八三	二、二五八	一、九五七	五	九	五

年種 齡別	在			來			種 計	合			種 計
	牝	牡	牝	牝	牡	牝		牡	牝	牡	
三才未滿	五〇	!	九八	一四八	九七〇	六二一	〇、八五九	二、一八四			
四才以上	!	!	!	!	二〇一三	!	!	!			
計	五〇	!	九八	一四八	二〇一三	!	!	!			

10

年種 齡別	在			來			種 計	合			種 計
	牝	牡	牝	牝	牡	牝		牡	牝	牡	
三才未滿	一七、八〇三	二、三〇一	〇、二七〇	二九、六八〇	二、六九三	四、八五一	二、二二七	五、〇一一			
四才以上	八、五四五	!	一五三	八、六九八	一〇、五五八	!	!	!			
計	二五、七五五	二、三〇一	〇、四二二	三八、三七八	一三、二一六	四、八五一	二、二二七	五、〇一一			

3 取引價額

備考 哈爾濱特別市公署資料ニ依ル。

取引價額ハ家畜ノ大小、年齢、種類、肥育ノ程度其ノ他ノ條件ニ依リ勿論一定セサルモ、康徳三年度家畜交易市場ニ於テ取扱ハレタモノニ就テ見ルト畜牛一頭當平均八五圓九八錢、豚二九圓七六錢トナツテ居ル。但シ畜牛ノ價額ハ積モ含マレタ平均價額テアルカラ成、畜ノミニ就テ見レハ九〇圓乃至一〇〇圓平均位ニナルト云ハレル。取引價額ノ季節變動ニ就テ見ルト畜牛ニ於テハ出廻數量ノ最モ少ナイ五、六、七月ノ三箇月カ比較的高價テアリ、豚ハ價額ノ變動少

11



月別	交易頭數	交易金額	一頭當平均價額
一月	六八四四	二一四二二五・五〇	三一・三〇
二月	三〇四四	九六五七二・八〇	三一・七三
三月	三六八四	一〇九六七八・八〇	二九・七七
四月	四一二七	一一、二六二・三〇	二九・三八
五月	四九二二	一三八七五二・八〇	二八・一九
六月	五五五八	一五四一七六・四〇	二七・七四
七月	四八五〇	一三四六〇六・六〇	二七・七五
八月	四九六二	一三五〇〇七・二〇	二七・七五
九月	五九八〇	一八八四九八・〇〇	三一・五二
十月	五二四八	一六六九三一・八〇	三一・八一
十一月	五二五〇	一五四六六三・五〇	三〇・〇三
十二月	六二八五	一九〇七六七・三〇	三〇・三五
計平均	六〇、六五四	一、八〇五一四三・〇〇	二九・七六

豚

月別	交易頭數	交易金額	一頭當平均價額
一月	二〇四五	一三七六五七・〇〇	六六・三二
二月	一、三二三	九九三五一・〇〇	七五・一〇
三月	一、二八八	一〇九四四五・五〇	八四・九七
四月	一、二三九	一一、八一〇四・〇〇	九五・三二
五月	一、二五二	一二、五六四八・五〇	一〇〇・三六
六月	一、〇八五	一一、四八一・五〇	一〇二・七五
七月	一、一〇一	一一、二九六八・〇〇	一〇二・六一
八月	一、三七一	一三四三八七・〇〇	九八・〇二
九月	一、七六二	一四五三六八・〇〇	八二・五〇
十月	二、四一七	二一七六三五・〇〇	九〇・〇四
十一月	二、〇六三	一六三、二〇三・〇〇	七九・一一
十二月	二、二六三	一七六四一三・七〇	七七・九六
計	一九、二〇九	一、六五一、六六二・二〇	八五・九八

畜牛

ク殆ト一定ノ價額ヲ維持シテ居ル。詳細ハ左表ノ如シ。



備考 1 濱江省公署資料ニ依ル  
 2 屠畜ノ集散地ハ縣内ニ止ル、縣外移出ハ牲畜ノミテ  
 了ル。

計	綏 化	蘭 西	肇 東	雙 城	阿 城	賓 州	呼 蘭	縣區	
								名	分
一、三九五	四〇〇	四〇〇	一〇〇	六〇	五八五	一〇五	一九五	頭數	畜
三三三	一〇六	一〇四	五〇〇	一四一	一三〇	一、五〇〇	三、九〇〇	同上見積肉量	牛
三九五〇	八四〇	二、一〇〇	一、〇〇〇	九二〇	六三〇	三八〇	八七〇	頭數	豚
四三一七	八〇六	三〇八	一、一八〇	八三七	八一九	三四九	二、〇七九	同上見積肉量	豚

b 近接縣内屠殺頭數及見積肉量(康德三年)

3 豚 4 畜牛屠殺頭數平均率 割七分

14 備考 1 特別市公署資料ニ依ル

計	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月	屠殺數量	
													別	區分
一七〇二五	二、二二三	一、九五八	一、六八四	一、六四六	一、一四九	九九六	九八四	九九八	九七一	一、〇九九	一、二五七	二、〇六〇	頭數	畜
三、一六八	三七三	三二八	三一五	二九八	二一五	一九七	二〇七	二一四	二〇四	二〇五	二三〇	三七二	同上見積肉量	牛
五九、四九九	六二〇	四七八	四七〇	六三八	四四八	四四五	六〇〇	四四二	四〇五	三六三	三一八	六九九	頭數	豚
四〇七八	四五三	三五二	三三九	四七二	三一〇	三〇八	三九九	二七一	二八九	二三五	二〇三	四四〇	同上見積肉量	豚

a 特別市屠殺頭數及見積肉量(康德三年中)

「附」 家畜交易市場入場家畜體重表

畜別	畜牛	體重			區分	頭數
		最高	最低	平均		
隊	六、八〇三、二九〇	四	九四、八七	二〇〇斤以下	二、九六五	
					四、五三三	
畜	一九、五七五	八六〇	一八、三五、〇二	五〇一以上	一、四六六	
				五〇以下	四七七	
畜	六、八〇三、二九〇	四	九四、八七	五〇一以上	一、四六六	
				五〇以下	四七七	
畜	六、八〇三、二九〇	四	九四、八七	二〇〇斤以下	二、九六五	
				五〇一以上	一、四六六	

備考 右三表ハ哈爾濱特別市公署資料ニ依ル。

5 品質ニ就テ  
a 畜牛

哈爾濱市場ニ出廻ル畜牛ノ五〇%餘ヲ占ムル蒙古牛ノ肉質ノ點ニ就テ谷次人氏、著「北滿洲概観畜産篇」中ヨリ引用スレハ呼倫貝爾産ノモノカ普通五、八才ノ比較的若關牛テアルカラ肉質ハ北滿市場ニ於テハ第一位ニアル。然ルニ蒙古牛ハ元來人爲的保護全クナク又濃厚飼料ヲ給與サルコトモナク、所謂草牛トシテ自然ニ成育シタモノテアルカラ筋間脂肪ヲ缺キ、他國産肉牛ニ比シテハ軟シテ優良トハ云ヘナイ。且蒙古牛ノ特徴テアリ、又缺點テモアル筋間脂肪ノ黄色ナルコト等モ將來研究ノ餘地ヲ殘スモノテアル。若シ之等ノ若牛ヲ北滿ノ潤澤ナ肥臘ヲ利用シテ科學的ニ肥育スルナラハ、凡ユル要素ニ於テ決シテ青島牛、朝鮮牛ニ劣ルモノテハナイト信セラレル。屠肉歩合ノ如キ現在ニ於テスラ四三%乃至四七%ニ達シ、肥臘專業ノ有望性ヲ立證シテ居ル。

豚

哈爾濱市場ニ出廻ル豚ノ六二%ハ在來種三七%ハ雜種、残り一%ト云フモノカ洋種トナツテ居ル。斯クノ如ク何等人爲的改良ノ跡ノナイ體軀嬌小ニシテ晩熟ナル在來種カ大半ヲ占ムルト云フコトハ經濟上竝利用價値ヨリ見テ最モ不得策テアリ之カ改良ハ緊急ヲ要スル問題テアル。即チ出廻豚ヲ年齡別ニ見テモ富才ノモノハ全數ノ僅ニ五%ヲ占ムルノミニシテ大半ハ二オテ屠殺サレテ活ル状態テアル。體重ハ成豚テ八六斤乃至一一五斤前後ノモノカ多イ。

在來種ハ一設ニ脂肪ヲ缺キ加工用トシテハ不適ニシテ餘リ飼迎サレナイ。哈爾濱ニ於ケル露人經營ノ豚肉加工場ニ於ケル使用原料ハ在來種及口シヤ種共ニ使用セラレテ居ルカ、口シヤ豚ハ在來豚ニ比シ體型豐圓ニシテ腿モ圓ク「ハム」原料トシテ遙ニ優良テアル。在來豚ハ腿扁平ナルノミナラス骨太ク「ハム」原料トシテハ不向ナル爲、口シヤ豚ノ不足ヲ補フ程度ニ於テ兩

者カ使用サレテ居ル。屠肉歩合ハ平均牝セ〇一七二%、牡セ四一七六%テアル。

運送其ノ他ノ經濟的考察

壹 牛

康德三年度哈爾濱市場出廻牛ノ二五%餘ハ海拉爾ヨリ發送サレテ居ル爲、例ヲ海拉爾ハ哈爾濱間ニトリテ畜牛一頭ニ對スル價額及輸送諸料リニ就テ考察スルニ現地ニ於テ價額六〇圓ニテ購入セルモノカ輸送其ノ他ノ諸經費ニ約二〇圓ヲ要シ哈爾濱著ノ八〇圓トナルカ、市場ニ於テ一般ニ取引サル價額ハ九〇一〇〇圓ナル爲、壹頭ニ付總額〇圓乃至二〇圓ノ利益ヲ得テ居ル譯テアル。尙詳細ニ亘ツテ各費目ニ付述フレハ左表ニ示ス通テアル。

現地購買價額（康德三年十月平均價額）一〇〇。〇〇

現地ハ哈爾濱間諸經費一〇〇。〇〇

(1) 現地旗公署税金（價額ノ百分ノ四）一〇〇。〇〇

(2) 現地	海拉爾間輸送費 (輸送牧夫費)	1110.00
(3) 海拉爾	稅捐局税金 (海拉爾市價ノ百分ノ五)	113.25
(4) 海拉爾	市政管理處輸出檢査料	1110.95
(5) 海拉爾	海拉爾ハハ爾濱間運賃	119.35
(6) 輸送途中	附添人費	1110.36
(7) 輸送途中	飼料代 (一車ニ付乾草參圓)	1110.27
(8) 哈爾濱	站檢驗料 (鐵路局獸醫段一車六圓 康德四年度ヨリ中込ノ答)	1110.27
哈爾濱	家畜交易市场徵收費目	1110.50
(1) 檢 驗	料	1110.30
(2) 交易	手數料 (取引價額ノ百分ノ五)	1110.00
(3) 仲介	人評價手數量	1110.20
哈爾濱	稅捐局交易稅	1110.50
哈爾濱	屠宰場徵收費目	1110.40

b

(1) 屠殺費	(大牛三圓、中牛二圓、小牛一圓)	1113.00
(2) 檢 驗	費 (大牛四〇錢、中牛三〇錢、小牛二〇錢)	1110.40
哈爾濱	稅捐局屠殺稅	1110.77
總 計		1110.27

(註) 右ノ他附添人ノ歸路汽車賃一三。五〇圓ヲ輸送費中ニ加算スヘキテアルカ此處テハ省ケル

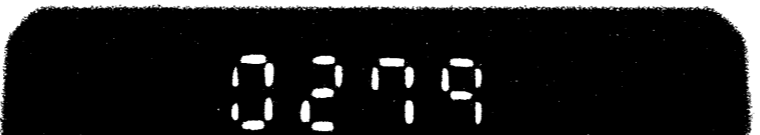
陸路運送サレルモノハ距離ノ遠近ニ依リ輸送途中ノ運費モ異ルカ大運量頭ニ割シニ乃至三圓 (主トシテ八件裝)ヲ要シ、之ニ運量ニ於ケル交易稅トシテ價額ノ百分ノ五ヲ徵收セラル。

豚

豚ニ於テモ同様鐵道ト陸路趕運トニ依リ移入セラレテ居ルカ之カ運賃其ノ他諸經費ニ就テ考察スレハ左ノ通テアル。

(1) 鐵道ニ依ル場合

普通一車ニ五〇乃至七〇頭積込ミ得ルカ平均六〇頭トシテ主要發送地ハ三棵樹間ノ運賃ハ左記ノ通テアル。



様ニ開キ及フ。

次ニ哈爾濱ニ移入サレテ屠殺迄ニ到ル諸經費左ノ如シ。

〔ハ爾濱家畜交易市場徴收費目〕

(1) 檢驗料 壹頭ニ付 一五 錢

(2) 交易手數量 取引價額ノ百分ノ三

(3) 仲介人評價手數量 二〇 錢

〔ハ爾濱稅捐局交易稅 取引價額ノ百分ノ壹〕

〔ハ爾濱屠宰場徴收費目〕

(1) 屠殺費 壹頭ニ付 成豚一。三〇圓、仔豚五〇錢

(2) 檢疫費 成仔共二〇錢

〔ハ爾濱稅捐局屠殺稅 一頭ニ付二四錢〕

〔陸路運送ニ依ル場合〕

產地ニ於ケル稅金ハ前述鐵道ノ場合ト同様テアルカ、輸送費トシテ飼料代及人件費壹頭當リ一圓乃至三圓位ヲ要スル見込ミテアル。

右ノ他最近トラツクラ利用シテ輸送サレルモノカ相當アル

封青山	綏化	滿洲	海倫	双陽堡	發送地名	一車運賃	附添人料 (一軒當一錢)	計	壹頭當リ 運賃
二七。〇〇	六五。〇四	四二。三六	一二。九二	三六。六〇	圓 錢	〇。六〇	〇。二五	三七。二〇	〇。六二
〇。四〇	一。二〇	〇。七二	二。二五	〇。六〇	圓 錢	〇。六〇	一。一〇	三九。三〇	〇。七一
二七。四〇	六六。二四	四三。〇八	一五。一七	三七。二〇	圓 錢	〇。六二	一。九二	四二。一四	〇。七一
〇。四六					圓 錢				

此ノ他積込地ニ於ケル稅金トシテ壹頭當リ七〇錢乃至一〇圓位積込積降ノ際ニ人夫賃トシテ一車四圓見當テアル。

二 哈爾濱附近飼養狀況

1 飼養概況

飼養牛ヲ役種別ニ見ルト乳牛ト役牛トニ分ケラレルカ、之ヲ分布  
状態ヨリ見テ乳牛ハ主トシテ特別市及鐵道沿線都市近傍ニ飼養セラ  
レ、其ノ他ノ地方ニ於テハ殆ト在來ノ滿洲牛ニシテ農耕用ニ供セラ  
レテ居ルモノテアル。

乳牛ノ飼養法ハ夏季ト冬季トノ二様ニ分レルカ夏期（五月中旬一  
九月末）ハ主トシテ野外ニ放牧シテ自由ニ青草ヲ採ラシメ飼料トシ  
テ穀ヲ補助的ニ幾分給與スル位ノ程度テアルカ冬季ハ全部廐舎ニ收  
容シテ干草ノ外濃厚飼料トシテ穀、豆粕、酒糟等ヲ可成潤澤ニ與ヘ  
テ居ル。

24 役牛ハ廐舎ト稱スルモノ殆トナク假令アツテモ極メテ不完全ナル  
モノニシテ僅ニ風雪ヲ凌ク程度ノ粗末ナルモノテアル。只一定ノ繫  
場ト飼槽ヲ備ヘテ居ルノミテ四季ヲ通シ夜間野天ノ下ニ繫イテ居ル  
飼料トシテ粟稈ヲ常ニ給與シ、農繁期ニ高粱、包米、豆粕等ヲ濃厚

飼料トシテ少量與フルニ過キナイ。

豚ハ之ヲ種類別ニ見ルト滿洲在來種「ロシヤ」ト稱  
サルル白色種及兩者ヲ雜種トニ分ケラレルカ、數ニ於テ在來種カ大  
部分ヲ占メ他ノ二種ハ鐵道沿線都市近傍ニ限ラレテ居ル。飼養法ハ  
極メテ簡單ニシテ庭内ノ一隅ニ柳枝ヲ以テ柵ヲ作り之ニ豚ヲ追込ミ  
飼養シテ居ル。年中屋外ニ自由放牧セシメ、夏季ハ附近ノ草原ニ放  
牧シテ青草ヲ嗜食セシメ之ニ小童ヲ附シテ居ル。冬期ハ收穫後ノ畑  
ニ放牧スルヲ常トスル。飼料ハ厨房ノ殘滓物ヲ主ナルモノトシテ居  
ルカ、都市附近ニテハ比較的安價豊富ニ得ラルル脱脂乳、穀、酒糟  
（原料高粱）ヲ幾分給與シテ居ル農家モアル。

飼料

25 給與スル飼料ノ季節ニ依リ或ハ使役、肥育ノ如何ニ依リテ其ノ種  
類及量ニ差アルハ勿論テアル。種類ニ付テハ前項ニ於テ略述セルカ、  
哈爾濱附近ニ於テ最も多ク飼養セララルル乳牛ノ飼料ニ關シテ一九二  
七年北鐵地畝處農業科ニ於テ調査セル資料「北滿沿線ニ於ケル乳牛

月別	穀		豆		高粱 酒糟	
	生産高 一袋九三斤	單位袋 當價額	生産高 一枚二八斤	一枚當價額	生産高(一町)	百町當價額
一月	九〇、五六二	一、四〇〇	六二、九二〇	一、三〇〇	三七、一〇〇	一、四四〇
二月	九一、四八七	〇、〇〇〇	七四、五八三	一、二〇〇	三五、九二五	一、四四〇
三月	九九、二〇〇	一、〇〇〇	六一、五九六	一、二〇〇	四三、七五〇	一、八九三
四月	一一六、四〇五	一、〇〇〇	二二、二七七	一、四〇〇	三六、三七五	〇、八九
五月	一〇八、七六一	一、〇〇〇	七二、五三二	一、四〇〇	四二、九九五	一、〇〇一
六月	一〇〇、一九二	一、〇〇〇	一一五、〇二七	一、七〇〇	三九、〇六四	一、三四
七月	?	?	?	?	四二、四〇〇	一、〇〇〇

見ヤウ。  
テハ此ノ他穀皮、穀等ヲ給與シテ居ル。燒鍋、糠棧等ニテハ肥脆ヲ  
自的トシテ自家ニ於テ生産サレル副産物即チ酒糟、穀ニ豆粕、豆腐  
糟、高粱等ヲ適當ニ配合シテ一日十錢見當ノ飼料代ヲ以テ約一ヶ月  
間肥育シテ賣却スルノヲ通例トス。  
尙參考ノ爲康德三年度主要飼料ノ生産高、價額ニ就テ左ニ掲ケテ

ノ特質「中ヨリ引用スレハ左表ノ通りテアルカ、飼養管理ニ著ルシ  
イ變化ヲ認メナイ状態テアルカラ現在ニ於テモ略之ト同様テアラウ  
ト推察サレル。  
哈爾濱附近給與飼料別百分比  
一 乾草ノミ與ヘルモノ 一〇〇  
二 乾草、穀ヲ與ヘルモノ 三一・四  
三 乾草、穀、豆粕ヲ與ヘルモノ 一九・八  
四 乾草、豆粕ヲ與ヘルモノ 〇・四  
五 乾草、穀、酒糟ヲ與ヘルモノ 二三・七  
六 乾草、穀、豆粕、酒糟ヲ與ヘルモノ 三・七  
七 乾草、穀、根莖類等ヲ與ヘルモノ 六・〇  
八 乾草、酒糟ヲ與ヘルモノ 一三・〇  
計 一〇〇・〇  
豚ノ飼料ハ一般ニ飼養頭數ノ少イ農家ニ於テハ厨房ノ殘滓物ヲ以テ  
足リルカ、相當纏ツテ五〇—一〇〇頭以上モ飼養サレル大農家ニ於



備考  
トス  
康徳三年大矢組商店ニテ軍隊、鐵路局ニ納入セル價額

月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	十一月	十二月	平均
釋 (百疋當價額)	二〇二五	二〇二五	二〇二五	一〇九〇	一〇九〇	一〇九〇	一〇九〇	一〇八〇	一〇八〇	一〇七〇	一〇七〇	一〇五五	一〇九一
算 (百疋當價額)	二〇二五	二〇二五	二〇二五	一〇八五	一〇八〇	一〇八〇	一〇八〇	一〇八〇	一〇八五	一〇七八	一〇七八	一〇七八	一〇九二

備考  
1 穀、豆、紮ハ當所商工班ニ於テ市内主要工場ニ就テ調査セル資料ニ依ル  
2 高粱酒糟ハ哈鐵産業處商工科ニ於テ市内主要工場ニ就テ調査セル資料ニ依ル

計	二月	一月	一〇月	九月	八月
1	一七八五六〇	一一七四四二	一一四〇八三	一二七一八六	九七三八九
1	一〇八九	一〇六一	一〇七六	一〇五〇	一〇一六
1	三五三、三九七	二八七〇四九	八三、三九七	三一、〇三〇	四三、三八八
1	一〇三二	一〇二三	二〇三〇	一〇九八	一〇九七
四六二二、六六〇	四四五、四〇〇	四三一、一二五	四一、三五〇	三二、五二〇	二三、六五〇
一〇三八	一〇六九	一〇四六	一〇四〇	一〇四七	一〇五〇





縣名飼育戸數	總飼育頭數	成			畜			仔			小計
		牡	牝	別	小計	牡	牝	別	小計		
呼蘭 五七〇	二,七八四	五五五	八三四	五八三	一,九七二	四〇〇	三〇八	一〇四	八二二		
賓州 二,一〇二	五,三七〇	四,五〇〇	二,九六一	一,〇〇九	三,八五五	九一七	五七七	二一	五,一五		
阿城 一,〇六〇	三,二八一	五〇四	五八一	四二〇	一,五〇五	二四六	四四五	八五	七,七六		
肇慶 六七九	二,四五三	五七三	九五二	二六二	一,七八七	二六四	三六一	四一	六,六六		
肇東 一一一	一,一二五	一九五	四六二	八九	七四六	一五八	二二〇	一	三,七九		
西 二七一	一,二五六	三〇九	四〇四	七四	七八七	二一三	二〇九	四七	四,六九		
綏化 一,二七九	二,九三三	〇九四	六三七	五三六	二,二六七	三七四	二二三	六九	六,六六		
計 六〇八二	一八,二〇二	四,六八〇	五,一六六	三,〇七三	二,九一九	三,五七二	三,四三三	三,六八五	二,八三		

b 近接縣  
畜 牛

種別	飼育頭數		成		仔	
	類	分	牝	牝	牝	牝
豚	一,二七五	一,二二二	三,四六一	九,九五七	七,五七三	三,九四四
計	一,二七五	一,二二二	三,四六一	九,九五七	七,五七三	三,九四四

備考 1 哈爾濱特別市公署資料ニ依ル  
 2 畜牛ハ康德二年十月末現在數トス、康德三年度ニ於テハ總數三、三〇一頭ニシテ幾分減少セルモ大差ナシ  
 3 豚ハ康德三年十二月末現在數トス

3 飼養頭數  
 特別市及近接縣ニ於ケル飼養頭數ヲ舉クレハ左ノ如シ  
 a 特別市

種別	飼養頭數		種別		役種別		年		齡									
	畜生	分	滿	露	洋	牝	牝	乳	役	二	三	四	五	六	七	八	九	十
畜生	七,七七七	四,八三三	七,二一八	四,六三三	六,三三一	三,七三五	四,二九二	四,一〇一	五,九一六	五,三三一	三,九一							

區分	飼育戸數	總飼育頭數	成		仔		畜	
			牝	牝	牝	牝	牝	牝
呼蘭	二〇五七七	五七二四一	五二九六	六六六九一	四一八五〇	二八四二	四二三七	一五三九一
賓	一八六一一	六七五四七	一八〇五	一〇四一九	四〇三三	七九七	六三一	一七七一
阿城	一七五八二	三九〇五二	四四七	四八四九	一七一四	四〇四二	四九二二	一九九〇
雙城	四〇五五〇	九三〇六七	三〇〇	一三〇三	四〇〇一	一七九〇	一七二二	四七〇四
遼東	八八二八	三三三五五	一六二六	四八八三	一〇七六	六八一	七三九	二四七九
蘭西	二八八五八	六二二八二	四四七〇	五七七八	三三九八〇	六八一	五九六一	二七三〇
綏化	一五五八六	三六九〇〇	八九〇〇	九八三三	三三九八〇	一〇〇五九	六六六一	二八八六
計	一五五八二	四一四一四	三〇七六四	四〇四一七	二二二四〇	三三三三	四〇三三	一六二〇

備考 1 右二表濱江省公署資料ニ依ル  
2 康德三年十二月三十一日現在トス

生産頭數

畜 牛

康德三年中ノ生産頭數ハ確實ナル資料ヲ缺ク爲實數ハ不明テアルカ、特別市ニ於テ蕃殖可能牝牛ヲ三〇〇頭ト見テ生産率ヲ九〇%トスレハ約二千頭ノ生産アルヘク、近接縣ニ於テハ成牝牛一六六頭ノ七〇%約三、五〇〇頭、合計シテ年五、五〇〇頭餘カ哈爾濱ヲ中心トスル近郊一帯ニ於テ生産サレルモノト推定セラル。然シテ特別市ニ於テ生産サレル二千頭ノ曠ハ此ノ内三〇〇頭カ屠殺サレル老廢牛ノ補充ニ充當サレ、残り一、七〇〇頭カ生后一ヶ月前後ニ食用ノ爲市場ニ出廻ツテ居ル。

豚ニ於テモ同様實數ハ不明テアルカ成牝豚數ヨリ推定スルニ特別市ニ於テ一萬二千乃至一萬四千頭、近接縣ニ於テ二三萬頭(康德二年度濱江省公署畜産統計ニ依ル)計約二五萬頭ノ生産アルモノト見テ大過ナカラウ。北滿ニ於ケル養豚力自給自足ノ建前上、生産豚ノ大部分ハ自家消費ニ充當サレ、農家ノ餘剩部分約五萬頭カ即チ哈爾

5 濱市場ニ向ツテ出廻ツテ居ルト謂フコトニナル。  
 家畜疾病  
 a 家畜傳染病  
 由來滿蒙ノ地ハ家畜ノ各種傳染病ノ集窟ト迄謂ハレ年々之等獸疫ノ爲ニ蒙ル損害ハ實ニ莫大ナルモノテアル。然ルニ哈爾濱カ北滿ニ於ケル牡畜並畜産物ノ消費地トシテ年々多量移入セラレテ居ル關係如ク流行シテ居ル。今康徳三年中特別市及近接縣ニ於テ發生セル畜牛及豚ノ傳染病發生數ヲ擧クレハ左表ノ通テアルカ、之等ノ數字ハ主トシテ報告ニ依ルモノノミナレハ實數ニ於テハ未タ未タ多數ニハルモノト推察サレレ。

1 畜牛傳染病發生頭數  
 特別市

計	炭疽	牛疫	牛肺疫	肺結核症	痘熱症 (痘疹)
計	七	八	一〇	一〇	一八
一月					
二月					
三月					
四月					
五月					
六月					
七月					
八月					
九月					
十月					
十一月					
十二月					
計	一〇	一〇	一八	六二	三四
計	一八	四	二	三	一三

近接縣

計	炭疽	牛疫	牛狂犬病
計	三	一	一
一月			
二月			
三月			
四月			
五月			
六月			
七月			
八月			
九月			
十月			
十一月			
十二月			
計	一〇	一〇	一〇
計	二	四七	一

E-1910

0286

37

病 虫 蟻			病 染 傳			畜 牛 (總數 二五三四頭)
計	胞 肝 囊 蟲 癭 蟲 症 症 症	計	牛 結 放 肺 核 線 疫 症 菌 症 症 症	頭 數	百 分 率	
一、〇五二	七、一五六	三、〇九七	六、七一九	一、〇〇五	八〇四	六四
四七、五六	二八、二四	一一、〇二二	七、一〇	三、〇九六	〇、二五	〇、一七
					〇、五四	

b 屠肉検査ニ現ハレタル諸疾病  
 哈爾濱特別市屠宰場ニ於テ康德二年度一箇年間ニ屠殺サレタル畜  
 牛及豚ニ就テ屠肉検査ノ結果發見サレタル諸疾病ハ左表ノ通テアル  
 カ、特ニ公衆衛生上注意ヲ要スヘキ疾病ニ就テハ勿論其ノ他ノ疾病  
 ニ於テモ可成多數ニ上ツテ居ル現狀ヨリ見テ將來益飼養管理法ノ改  
 善、衛生思想ノ向上ニ依リ之カ撲滅ノ必要ヲ痛感サレル。

36

備考 1 特別市公署及濱江省公署資料ニ依ル

2 康德三年度中

計	豚 疫	豚コレラ	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	十一月	十二月	計
三〇	三〇														三三二
												七七			一
															二七八
															六二一
															九七
															五二四
															計

近接縣

計	豚丹毒	豚疫	豚コレラ	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	十一月	十二月	計
一			一													一
二			二													二
二			二													二
五			五													五
四		一	三													四
一	一															一
一			一													一
八	一	四	三													八
七	一	一	五													七
一			一													一
一			一													一
五	三	六	四													五
四			五													四
			計													計

2 豚傳染病發生頭數  
 特別市

E-1910

0280

病各				病虫蠕					病染傳		病名豚	(總數六三、八八〇頭)
膿	氣管支炎	黃腫病	水腫病	寄生虫	胞虫症	肝虫症	旋毛虫症	囊虫症	計	結核症		
二	七			三	二			三	八	七	三	
三	二		二	四	八	一	七	五	一〇	七	九	
六	五		七	四	一	五	六	一		一		
				五	三			五		一	〇	
〇	一	〇	〇	四	〇	〇	〇	一	一	〇	〇	
〇	〇	〇	〇	一	一	〇	一	〇	二	二	〇	
三	一	〇	〇	一	一	〇	二	五	七	一	六	
七	三	一	四	三	一	八	一	一				

棄廢	全一頭	合計	病各				病名畜牛	(總數二五、三四四頭)
			計	其ノ他	氣管支炎	水腫病		
內	臟	部	部	部	部	部	頭	數
二	一	一	四	四	六	六	二	三
〇	六	四	三	八	〇	三	五	五
〇	四	二	〇	一	〇	〇	四	一
	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	七	九	〇	一	〇	〇	〇	〇
	六	三	一	〇	〇	〇	〇	〇
	三	四	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	八	六	一	〇	〇	〇	〇	〇

E-1910

0288

棄 廢			合 計	其 計 他	病 豚 名 頭 數	百 分 率
内 臟	頭 部	全 部				
四二六九二	四二五六七	一八一一九	三六三四二	九三	(總數六三八〇頭)	一〇・一五
六六〇八三	六〇六六	二〇八五	五六〇九〇	一〇七〇		一〇・七〇

備考 1、康徳二年度哈爾濱特別市公署衛生科資料ニ依ル。

三 改良増殖計畫及其ノ機關

現在哈爾濱ヲ中心トシタ近郊一帯ニ亘ル畜産ノ改良増殖ニ參與セル箇所ハ哈爾濱鐵路局、濱江省公署、哈爾濱特別市公署ノ三機關テアルカ、鐵路局ハ主トシテ鐵道沿線愛護村、濱江省公署ハ特別市ヲ除ク全省内(近接縣ヲ含ム)、特別市公署ハ特別市ヲ中心トシテ之カ開發ヲ圖リツツアルカ、今之等各機關ノ改良増殖計畫及施設ニ就テ概説セム。

1 哈爾濱鐵路局産業處

同所ニ於テハ滿洲國ノ産業五箇年計畫ニ基ク畜産ノ積極的方策ト相俟ツテ新年度ヨリ益業務ノ擴張、施設ノ充實ヲ計畫サレテ居ルカ其ノ中畜牛、豚ニ關スル項目ヲ擧クレハ左ノ如シ。

(1) 種畜場ノ經營

(イ) 綏化種畜場(種豚育成所)

(ロ) 哈爾濱農事育成所(乳牛育成所)

(2) 種畜配貸付



線別	現配貸付数	十二年度配貸付見込数	計	現配付数	十二年度配付見込数	計
京濱	(一七)	八九	五〇	一一	(二〇)	五
濱洲	一六	二〇	三六	一	(二〇)	五
濱綏	三三	一〇	四三	一	一	二五
拉濱	二〇	一〇	三〇	一	(一〇)	一〇
濱北	(一四)	一五	二〇	一	(二〇)	五
北黒	四	二〇	二四	一	(一〇)	五
計	(三二)	三一	四九	一一	(八〇)	二〇

42

備考 1 種豚ノ( )内數字ハ配付數ヲ示ス  
 2 乳牛ノ( )内數字ハ役肉牛ヲ示シ一般民間ヨリ在來ノ優良牝牛ヲ購入ノ上配付スル頭數ヲ示ス。此ノ事業ハ今後繼續事業トシテ實施サレル意向テアル。

(3) 畜産實地指導  
 (4) 種豚貸付先ノ飼養管理蕃殖ニ關スル指導

43

(4) 種豚種付所新設  
 哈爾濱農事育成所、種鶏場、白家種畜場ノ三箇所ニ種牡豚ヲ繫養シ一般ノ利用ニ應ス

(5) 畜産加工所關係業務ニ對シ協力實施ス  
 改良増殖機關トシテノ前述ニ機關ノ主要業務及現在繫養種畜ノ頭數ヲ示セハ次ノ如シ

(1) 哈爾濱農事育成所  
 (イ) 業務  
 (一) 種乳牛ノ繁殖及育成  
 (二) 種乳牛ノ配付  
 (三) 畜産ノ指導獎勵  
 (四) 家畜疫病ノ豫防制退  
 (五) 乳製品製造

(2) 繫養頭數

E-1910

0290

一 乳製品ノ製造及營業者ヲ地方家畜組合ニ加入セシムル爲畜産

計畫項目

過去ニ於ケル北鐵時代ノ改良増殖計畫ハ専ラ地畝處農業科ニ屬スル畜産機關ニ於テ樹立サレ、同時ニ事業計畫ノ遂行ニ當ツテ指導機關トシテ各種事業ノ指導監督ヲ行ツタ。今計畫ノ全般ニ亘ル資料ヲ缺ク爲充分窺知スルコトヲ得ナイカ、同所ニ於ケル一九二二―三三年ノ事業成績報告ニ依リ結果ヨリ見テ計畫ノ一斑ヲ推知シ得ルト思ハレルノテ畜牛及豚ニ關係セル部分ノミ拔萃シテ左ニ掲クルコトトシタ。

備考 右各表ハ哈爾濱鐵路局産業處資料ニ依ル

計	基礎豚		基礎豚候補		生産仔豚		計
	牝	牝	牝	牝	牝	牝	
二二	五	一七	一	六	六〇	四八	七一
六					一〇八	六五	一三六

(四) 緊養頭數

(2) 綏化種畜場

(4) 業務

- (一) 種豚ノ繁殖及育成
- (二) 種豚ノ配貸付
- (三) 畜産ノ指導獎勵
- (四) 家畜疫病ノ豫防制遏
- (五) 農業氣象ノ觀測

計	シヨートホーン種		シンダントール雜種		ホルスタイン種		種類	性	成畜	犢	計
	牝	牝	牝	牝	牝	牝					
二二	四	二	一	一	一九	一九					
五五		七		三		一五					





業機關ノ設置

二 乳製品製造者及之カ市場ノ指導的機關トシテ東鐵ノ工場網ヲ作ルコト

三 乳牛ノ増殖機關

四 種畜場ヲ各地ニ設置スルコト

五 小家畜業(羊、豚、家禽)ノ改良、發達方策

以上ノ項目中畜牛ニ關スル部門ニ就テ見ルニ改良ノ方針カ乳牛ニ重キヲ置カレテ居ツタコトハ勿論テ、其ノ實施機關トシテ一九二三年ニ哈爾濱農事試驗場カ選ハレ、其處ニ養牛場ヲ設ケタ。同所ハ北鐵全般ニ亘ル改良増殖ノ中心機關トシテ模範的ナ乳牛ノ良種カ集メラレテ居ル。種類ハシンドグシタール種テアルカ開設後四年間ハ哈爾濱市又ハ其ノ近郊ヨリ能力優秀ナルモノヲ撰擇購入シテ漸次増殖ヲ圖ツタ。同所ニ於テ生産セル犢ハ廣大ナ放牧地ヲ有スル安達農事試驗場ニ送ラレテ、其處テ育成サレタ。成牛ハ哈爾濱農事試驗場ノ補充更新ニ必要ナ丈ケ送り返シ殘餘ハ安達ニ繋留シタ。斯クテ安達ニハ漸次

飼養頭數ノ増加ヲ見タカ、成牡牛ハ種牛トシテ所要ノ地ヘ送り、又ハ個人ニ賣却サレタ。牝牛ノ大部分ハ其處ニ殘サレテ産乳ハ同試驗場ノバタ工場ノ原料用トサレタ。

種牛場トシテ一九二三年ノ半迄ハ安達一箇所ノミテアツタカ、同年終リニハ海拉爾、免渡河、博克圖、扎蘭屯、寬城子ニ設ケ其ノ他ニ農事試驗場(愛河、哈爾濱)及香坊ノ予工場ニ種牛ヲ置イテ一般ノ利用ニ應シタ。結果カラ見テ最モ成績良好テアツタノハ保溫設備良好ナル畜舎ニ入レ飼育法モ正シク良種モ多イ哈爾濱附近ト安達テアル。西部線(單ニ西部線トアルモ西部線ノ内博克圖以西ノ地方ナラム)ニテハ事情異リ飼育管理法ニ不備ノ點多ク又雜種モ多ク改良ノ效果モ見ルヘキモノカナカツタ。

養豚ニ就テハ北滿ニ於テ種々經濟的好條件ヲ具ヘテ居ルニモ拘ラズ此ノ地方ニ於ケル養豚状態カ非常ニ貧弱ナルモノテアツタ爲東鐵農業科ニ於テ一九二四年ノカ改良増殖ニ著手シ、先ツ滿鐵公主嶺農事試驗場ヨリ種豚トシテバタクシヤ種ヲ購入哈爾濱農事試驗場ニ飼

養シ北滿最初ノバクシヤ種豚場ヲ開設シテ在來種トノ交配ニ依リ好成績ヲ收メタ。依テ一九二六年更ニ十四頭ノバクシヤ種ヲ入レテ哈爾濱農試及同年新設ノ安達農試、香坊等ノ工場ノ種豚場ニ收容シテ増殖ヲ圖ツタ。

一九二七年ヨリ之等種豚ノ一部ハ民間養豚者ニ順次賣却サレタカクシヤ人ハ黑色豚ヨリ白色豚ヲ好ムタノテ一九二八年カサダヨリヨクシヤ大型種牝五頭、牡二頭ヲ購入シテ、前記三種豚場ニ收容シテバクシヤ種ト共ニ増殖ヲ圖レリ。翌二九年ニハバクシヤ種補充ノ爲アマリカヨリ牝四頭、牡二頭ヲ購入セリ。斯クシテ東鐵地畝處ニ於テハ銳意純粹種及雜種ノ生産ニ努メタル結果東鐵沿線及哈爾濱附近ニテハクシヤ人ノミナラス滿人養豚業者ニモ純粹種又ハ雜種ノ飼養頭數ノ増加ヲ來シ養豚ノ改良増殖ニ裨益スルトコロ甚大デアツタ。

2

濱江省公署實業廳農務科

濱江省公署ニ於テハ中央ノ產業五箇年計畫ノ實施ニ應シテ改良増産ノ指導實施機關トシテ次ノ諸機關ヲ擴充若ハ新設スルコトナツタ。

イ 哈爾濱國立種羊場ヲ擴充ス

ロ 哈爾濱國立種馬場ヲ新設ス

ハ 哈爾濱省立種畜場ヲ新設ス

ニ 縣立種畜場現在十三箇所ヲ十六箇所ニ増設ス

右ノ外九縣ニ防疫員ノ配置ヲ爲ス等基礎施設ノ擴充並人員ノ充實カ主要項目トナツテ居ル。當省ニ於ケル改良増殖ノ重點カ綿羊、馬匹、豚ニ置カレ、畜牛ニ關シテハ將來省縣立種畜場ノ充實ヲ俟ツテ順次著手サレル豫定デアル。

豚ノ改良方針ハバクシヤ種ノ選定ヲ行ヒ、之ニ依ル雜種生産法ヲ講シツツアル、同所ニ於ケルバクシヤ種ノ移入ハ康德元年實業部配付ノ八頭ニ初マリ爾來引續キ無償配付或ハ補助金交付ニ依ル配付ヲ實施シツツアリ、康德元年度以降ノ配付狀況ヲ示セハ康德元年度ハ四縣ヘ八頭、二年度一三縣ヘ七一頭、三年度一三縣ヘ一四〇頭總計二一九頭ニシテ内斃死頭數五一頭ナル。之等優良種トノ交配ニ依リ生産セラレタル優良一代雜種總數ハ康德三年度末ニ於テ六、

七一八頭ノ多數ニ上ツテ居ル。本事業ハ繼續事業トシテ今後益擴大サルル模様テアルカ差當リ、康徳四年度ニ於テハ改良種豚二四〇頭ヲ移入シ縣種畜場ヲ主體トシテ之カ改良増殖ヲ圖ル計畫テアル。現在近接縣中種畜場ノ設置サレテ居ル縣及繁養種豚頭數ヲ舉クレハ左ノ如シ。

縣區	名分						計
	呼蘭	賓城	阿東	肇東	蘭西	綏化	
牝	一一	二	四	一	二	一	三三
成	一〇	一	五	一	一〇	九	三六
豚	二二	三	九	二	二	二	六九
計	六	一	二	一	一	七	一六
牝	一一	二	二	一	一	五	三一
仔	一七	二	四	二	一	二	四七
計	三九	五	三	四	二	三	一一六
合計							

50

備考 1 濱江省公署資料ニ依ル  
2 康徳三年十二月末現在數トス

3 哈爾濱特別市公署農政科

同所ニ於テハ康徳四年四月ヨリ管内沈家王崗ニ種畜場ヲ設置シテ種豚、種羊、種鶏ノ繁養、特ニ養豚ニ主力ヲ注キ在來種ノ改良増殖ヲ企圖シテ種畜場ニバシヤ種ヲ飼養スルコトナレリ。今同所ニ於ケル改良増殖ノ計畫ヲ舉クレハ左ノ如シ。

純粹種	康徳四年				計
	同五年	同六年	同七年	同八年	
純粹種 (牝一八、牡二)	二〇一〇八	一〇八	一〇八	一〇八	四五二
一回雜種	!	四八六〇	九七二〇	九七二〇	二四三〇〇
二回雜種	!	!	!	!	二四三〇〇
計	二〇一〇八	四九六八	九八二八	三八九八八	五三九一二

備考 哈爾濱特別市公署資料ニ依ル。

以上述ヘタルトコロヲ綜合スルニ現狀ヲ以テスレハ哈爾濱市場ニ於ケル活牛及活豚需給關係ハ必スシモ圓滑ナル狀勢ニアリトハ謂ヒ難ク

51

E-1910

0294

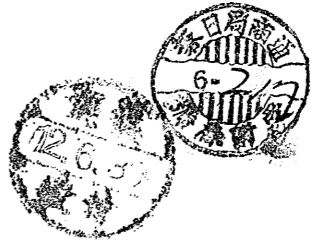
又飼養管理ノ狀況ニ於テモ哈市及鐵道沿線地帯ノ極ク小範圍ヲ除イテハ依然舊態ヲ墨守シテ幼稚ナル原始的型態ノ域ヲ脱セス百年一日ノ如ク何等改良ノ跡ヲ止メス。從テ家畜ノ資質ハ劣等ニシテ利用價值ニ乏シク、量ニ於テ豊富ナラサルノミナラス質ニ於テモ粗惡ノ譏ヲ免レナイ。

此ノ地一帯カ地理的ニ見テ畜産物ノ一大消費地タル哈爾濱ヲ近クニ控ヘ、種々好條件ヲ備ヘ畜産ノ發達スヘキ可能性アルニモ拘ラス今日迄遲々トシテ進マサリシ原因ニ就テハ種々アラウカ、其ノ一ツトシテ匪禍水害カ絶エナカツタ關係上勢ヒ産業諸施設ヲ等閑視シ、治安ノ維持ニ專心シナケレハナラヌ事情ニアツタコトハ想像ニ難クナイ。然レ共今後治安ノ肅正ニ依テ農民ノ不安モ一掃サレ農民ノ經濟生活向上ノ必然ト之ニ對應スル畜産指導就中家畜ノ改良増殖飼養管理ノ改善ハ先決條件テアリ、更ニ滿洲産業五箇年計畫遂行途上、畜産部門ノ重要性ヨリ鑑ミ、焦眉ノ問題テアル。

附 参考文献

- 1 北滿洲概観 滿鐵哈爾濱事務所編
- 2 滿洲畜産資源調査報告第四編第四卷 滿鐵經濟調査會
- 3 東支鐵道沿線ニ於ケル畜産 滿鐵哈爾濱事務所編
- 4 北鐵沿線ニ於ケル乳牛ノ特質
- 5 東支鐵道地畝處農業科報告(畜産ノ部)

通商會 日 報 載 録  
 年 7 月 6 日  
 年 第 154 號



通商局

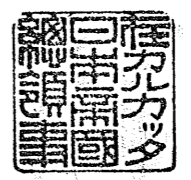
普通第二三〇號

昭和十二年五月二十七日

在甲谷陀

總領事 米澤 菊二

外務大臣 佐藤 尚武 殿



全印度家畜

於ケル印度總督ノ演說報告ノ件

全印度家畜會議（五月二十五日）シムラニ於テ開催セラレ、印度總督ノ演說アリタリ、其要旨御參考遊左ノ通り、報告申進ナリ

記

一 本會議ノ目的ハ印度ニ於ケル家畜業ノ發達及改善ヲ計ルニ在リ  
 二 從來本事業ノ中央政府ニ與ヘラレタル仕事ハ州ヘノ特殊ノ指令、一般的研究、家畜疫病ノ豫防等ニアリタルカ、最近ハ右ノ外州政府トノ聯絡ヲ計リ相互ノ情報交換ヲ行ヒ居レルカ、右ハ好成績ヲ擧ゲ居レリ

在カルカタ日本總領事館

昭和十二年六月廿九日接受

21

三 牡牛ハ印度農業ノ基礎ヲナスモノニシテ此ニ爲メニ牛ノ全般的改善ヲ計ルコトハ有意義ナリ、印度ニ於ケル一年取扱メ家畜ヲ評價スレハ家畜ノ價格、勞力、搾乳、肥料其他ヲ合セ百三十億留比ニ達ス右ハ勿論概括的評價ナルモ家畜カ如何ニ大ナル價值ヲ有スルモノナリヤ及如何ニ國富増進上大ナル役割ヲ演スルモノナリヤヲ示スニ十分ナリ

四 今回ノ會議ニ於テハ牛カ主題トナルモ同時ニ羊及山羊モ亦議題ニ入ルヘキナリ

五 牛乳ノ生産及供給ノ問題ニ關シテハ牧畜業ノ問題ト共ニエヌ、（シ）ライト博士カ最近五ヶ月間ノ調査ノ結果提出シタル報告ニ大ナル期待ヲ懸ケ居ルモノナリ

六 種屬改良ノ技術ハ血統ノ正確ナル記錄ニ基キ之ヲ行ハサルヘカラス、依ツテ帝國農事研究委員會ハ州ノ關係當局ト計リ一小委員會ヲ作り右小委員會ノ下ニ血統記錄書ヲ作成スルコトトシ、右ニ依リ種屬ノ性能ヲ定ムルコトトセリ

在カルカタ日本總領事館

E-1910

0296

22

印度ハ氣候ノ點ヨリ見ル時一般の標準ニ合致スル牧畜地ニハ非ス  
 其收ニモ拘ラス國內ノ牧畜地ノ改善及其擴張ハ家畜ノ全般の  
 標準ヲ高ムルニ才分ナリ去レハ今後飼草ノ計畫的收獲ヲ計ル必  
 要アリ若シ耕作者カ飼草收獲ノ上ニ改善ヲ施シ彼等ニ灌漑上一層  
 ノ便益カ與ヘラルルコトナラハ飼草產出ノ増加ヲ見ルニ至ルヘ  
 ハ要之牧畜業ノ成功ハ關係當局カ技術上、行政上及財政上ニ才分ナ  
 ル能力ヲ有シ不動ノ政策ト之ヲ遂行スルタメノ努力ニ俟ツ處頗  
 ル大ナリ云々

本信寫送付先 孟買

在カルカタ日本總領事館

件名  
 第三部  
 昭和十二年六月拾四日收受

東亞局  
 公普通第一一四號

昭和十二年六月五日

在赤嶽  
 領事代理 工藤 敏次郎



外務大臣 廣田 弘毅 殿

昭和十二年六月五日附在 滿大 使宛公信 普通

第一五四號寫送附

件名

熱河省立赤峰種畜場並附屬畜產技術員養成所  
 開設ニ關スル件

在赤峰日本帝國領事館

分類 E 4. 3. 2. 8

E-1910



別紙添付

普通第一五四號

昭和十二年六月五日

在赤峰  
領事代理 工藤 敏次郎

在滿洲國  
特命全權大使 植田 謙吉 殿

熱河省立赤峰種畜場並附屬畜產技術員養成所  
開設ニ關スル件

熱河省公署ニ於テハ本春四月來滿洲國產業五ヶ年計畫ノ一トシテ  
凌源農學校開設準備ヲ進ムル一方別記要綱ニ基キ赤峰ノ西方九料  
國立緬羊改良場隣接地ニ省立赤峰種畜場並附屬畜產技術員養成所  
開設準備中ナリシ處諸設備未完成ナルモ技術員ノ養成緊急ヲ要ス  
ルモノアルニ鑑ミ不取敢國立緬羊改良場内建物ノ一部ヲ之ニ充當

在赤峰日本帝國領事館

開設スルコト、シ六月一日同改良場ニ於テ省公署實業廳長ノ外赤  
峰日滿各機關代表者多數參列ノ下ニ前記凌源農學校ト日ヲ同シフ  
シ開場並開所式ヲ舉行セリ

因ニ種畜場及養成所敷地ハ未確定ナルモ大体緬羊改良場ノ西隣平  
地ヲ豫定シ事務所、畜舎、校舎等ハ豫算三万七千圓ヲ以テ本年  
中ニ完成シ本年度ハ豚三十頭、鶏百羽ヲ飼養シ明年度ヨリ牛ヲ飼養  
スル豫定ナリト尙技術員ハ現在六十五名アリ熱河省内各縣ヨリ二  
名乃至六名宛選抜シタル優秀青年（十八才ヨリ三十才迄）ニシテ  
費用ハ當該縣又ハ村ヨリ一人月額五圓ヲ負擔セラレ目下連日午前  
中ハ畜産技術習得午後ハ牧草耕種ニ從事シツ、アリ現在職員ハ日  
本人技士二名外二名滿人通譯一名アリ

本信寫送附先 大臣 奉天 錦州 承德

在赤峰日本帝國領事館

E-1910

0298

種畜場、畜産技術員養成所設立要綱

一、省立赤峰種畜場（併設畜産技術員養成所）設置目的  
省立種畜場ハ管内種畜ノ選定補給ヲナスト共ニ畜産業ノ開發指  
導ニ從事スルヲ目的トス  
尙本場ニ畜産技術員養成所ヲ併設シ畜産ニ關スル知識及其ノ應  
用技術ヲ實習セシメ管内畜産業ノ技術員ヲ養成ス

二、位置

省立畜産場ハ國立赤峰綿羊改良場ニ隣接設置シ畜産技術員養成  
所ハ之ヲ省立種畜場ニ併設ス

三、場員

本場ニ左ノ職員ヲ置ク

A 場長 一名 日系薦任待遇技術員

場長ハ種畜場並畜産技術員養成所ニ關スル一切ノ事項ヲ指  
揮監督ス

B 技術員 日系一名（委員待遇）

在赤峰日本帝國領事館

技術員ハ場長ノ命ニヨリ種畜ノ改良技術ヲ司リ畜産技術員  
養成所教師ヲ兼任ス

四、畜産技術員養成所ニ左ノ職員ヲ置ク

A 所長 種畜場長之ヲ兼任ス

所長ハ本所ノ指揮監督ヲナス

B 教師 二名（委員待遇日系一名滿系一名）

教師ハ所長ノ命ヲ受ケ養成所生ヲ教育ス

C 收容數 六五名（一縣五名）一個年間（四月一翌三月）

以上

在赤峰日本帝國領事館

E-1910

0299







通商局日報 濟載  
昭和十二年十二月一日  
第 27 號

不詳

通商局

普通事務第九號

昭和拾貳年九月拾日

在亞

臨時代理公使 寺嶋 廣

多務大臣 廣田 弘毅 殿

第四十九回畜畜品評會ニ於ケル農相演說要旨

總通 211.8 府

報告

八月二十一日、アエンスアイレス、市ニ於テ舉行セラレタル亞國農會主催第四十九回畜畜品評會開會式ニ於ケル演說中、亞國農務大臣ハ、亞國都會の發展ハ農村繁榮ノ結果ニカ、アラガルヲ以テ國家繁榮ノ基ハ農村ノ振興ニ在リトシ農

在アエンスアイレス日本領事館  
亞亞帝國公使館

昭和十二年拾月廿九日接受  
別紙添附  
道二 12.10.29 受付

Handwritten scribbles and marks at the top left of the page.

畜産業の發展ニ就テハ政府ハ不斷の努カヲ拂ヒ未タレルガ特ニ農畜産品ノ價格維持ニ努メ未タレル處、恰モ世界經濟界ノ好轉ト相俟テ農畜産品ハ稀有ノ輸出増進ヲテシ農牧業者ヲシテ數年、恐慌ヨリ今日ノ繁榮ニ至ラシメタル事實ハ特筆ニ價ス。ト冒頭シ過去數年向ニ於テ政府ノ実行セル農村ニ対スル各種の事業及施設ヲ四羅列シ、更ニ農牧業ニ対スル將來ノ振興策トシテ、政府ハ今次農畜産業ノ繁榮ニ更ニ一歩ヲ進メ、農畜産業者ノ直接製産市場進出ヲ指スモノナリ。而シテ既ニ獸肉生産者ハ亞國獸肉生産者組合ヲ組織シ直接取引ニ関係スルニ至レルガ、同組合の冷凍製肉所經營ニ就テハ政府ハ目下鋭意講究中ナリ、又他方生産者ノ經營スル、製産市場進出並獸肉消費者ニ対スル畜牛の衛生状態ノ完壁ヲ期スル目的

在アエンスアイレス日本領事館

E-1910



不詳

通商局日報 昭和十二年十二月二十一日 第27号

通商 211.8 付

通商局

普通第千九百九号

昭和十二年九月拾日

在亞

臨時代理公使

寺嶋廣

多務大臣 廣田弘毅 殿

第四十九回畜産品評會ニ於ケル農相演説要旨

九月二十一日

八月二十一日、バエスアイリス市ニ於テ舉行セラレタル亞國農會  
十九回畜産品評會開會式ニ於テ演説中、亞

臣ハ、亞國都會の發展ハ農村繁榮ノ結果ニカ  
テ國及繁榮ノ基ハ農村ノ振興ニ在リトシ農

在フエノス・アイリス日本領事館  
在亞 帝國公使館

本信照合票挿入先

四角の項目  
4/0/0/0

Handwritten scribbles and marks at the top left of the page.

畜産業の發展ニ就テハ政府ハ不断の努カヲ拂ヒ未タレルカ特  
ニ農畜産品ノ價格維持ニ努メ未タレバ、恰モ世界經濟  
界ノ好轉ト相俟テ農畜産品ハ稀有ノ輸出増進ヲナシ  
農牧業者ヲシテ数年ノ恐慌ヨリ今日ノ繁榮ニ至ラシ  
メタル事實ハ特筆ニ價ス。ト冒頭シ過去数年間ニ於テ  
政府ノ実行セル農村ニ対スル各種の事業及施設ヲ四維列  
シ、更ニ農牧業ニ対スル將來ノ振興策トシテ、政府ハ今次ノ農  
畜産業ノ繁榮ニ更ニ一歩ヲ進メ、農畜産業者ノ直接  
製産市場進出ヲ目指スモノナリ。而シテ既ニ獸肉生産  
者ハ亞國獸肉生産者組合ヲ組織シ直接取引ニ関係スル  
ニ至レルガ、同組合の冷凍製肉所經營ニ就テハ政府ハ目下鋭意  
研究中ナリ、又他方生産者ノ經營スル製肉所並ニ獸  
肉消費者ニ対スル畜牛の衛生状態ノ完備ヲ期スル目的

在フエノス・アイリス日本領事館

昭和十二年拾月廿九日接受  
別紙添附  
通二  
12.10.29  
受付

E-1910

10 4/2

ヲ以テ檢疫施設充實ノ必要ヲ認ムルモノナリ、又農業者  
 ニ對シテハ現ニ完成シツアル穀物エレベーター、畜肉  
 生産者組合の如キ農業者者聯合會ヲ組織シ農業者ヲ  
 シテ直接其生産品ノ國際取引ニ干與セシム以テ中間介  
 在者ニ依ル利益ノ斷ヲ防止スルカ、更ニ農牧技術ヲ  
 習得セシムル為ニ農業學校増設ノ必要ヲ感ズルモノナリ。  
 又植民問題ニ關シテハ官有地植民安ホヲ研究中ナリト述  
 べ、最後ニ是等既ニ計畫中ノ諸般施設ノ滑ルヲ進  
 行ヲ期スル為ニ農牧業者各位ノ協カニ待ツル大ナルヲ指  
 摘シ、其應援ヲ希望セリ。  
 本新聞切取相添報告也。

在プエノス・アイレス日本領事館

E-1910



11.80

LA GANADERIA ARGENTINA NO NECESITA SUBSIDIOS AYUDAS NI SUBVENCIONES

El doctor Cárcano anunció así el retiro del aporte oficial a las exportaciones

En nombre del Poder Ejecutivo usó de la palabra luego el ministro de agricultura, quien inició su discurso expresando que la exposición ganadera afirma el espíritu creador de nuestro tiempo, pues define y precisa la personalidad de esta ciudad de múltiples actividades que debería olvidar a veces "la causa y sustento de su vida y su firme expansión si no sintiera resonar cada año en este lugar la voz clamorosa del campo argentino, con su ganado más fino y sus criadores más reputados, y que es en el trabajo campesino donde reside la fuerza, el bienestar y el progreso de la República."

Diversos conceptos expresó a continuación, para hacer notar que la capital es y será el reflejo de la campaña. Prosiguió manifestando que actualmente los productos agrícolas y ganaderos se encuentran experimentando los efectos de su valorización debido "a la política agraria del gobierno nacional, la cual ha permitido arañar los mayores beneficios para nuestros productores"

al factor señalado por la mejora de la situación económica mundial.

La acción oficial en favor de la industria...

Ningún hombre de campo puede olvidar que en los momentos difíciles, el Poder Ejecutivo puso a su lado todo el estudio, estudio detenido y acción continuada; rápida decisión y prudencia resolutiva; oportuna y firme. No solo señaló el camino, sino que lo abrió y lo renació, y tampoco nos apartamos de su lado, ni disminuimos los apartados de la preocupación y estímulo prometidos. La industria agraria habla ya un idioma nuevo. Pero no ha terminado la tarea de dotarla de conocimientos técnicos y ensayos experimentales; de instituciones e instrumentos de gobierno permanentes, fuertes y eficaces, para hacerla más sólida, sana y próspera. Necesitamos estudiar cada industria y sus posibilidades para armonizarlas con el desarrollo de las demás y adaptarlas a las características económicas y sociales de la Nación. Estamos empeñados en hacer un Ministerio de Agricultura cada día más capaz, eficiente y comprensivo de la inmensa riqueza que gobierna. No basta crear instituciones, servicios y reparticiones, al frente no se colocan hombres instruidos y responsables, honestos y activos. Al país no le interesan títulos sin contenido, ni el papelero burocrático que deriva las más claras capacidades. Siguiendo a los mejores tradiciones, el Ministerio de Agricultura debe ser fuerza activa, que enfrente y resuelva con acierto problemas concretos, con la urgencia que reclaman los mismos hechos.

en libros, pero los artículos encuentran siempre apoyo en la producción de ganado. Después de visitar la Patagonia, afirmamos más este concepto. Aquella industria ganadera no puede circunscribirse a la vida primitiva pastoril. Es posible y necesario desarrollarla en los valles andinos y regiones fértiles, núcleos de trabajo agrícola. Cuando el arado llega al suelo, se quiere más la tierra que se traiga de ser argentina.

Debemos empeñarnos en perfeccionar la crianza y engorde del ganado, a base de prácticas higiénicas. Al estudio sistemático de las enfermedades, tenemos que agregar muy a especialidad el fomento del mismo desde el punto de vista económico. Hemos comenzado el estudio de la alfalfa para asegurar líneas púras y variedades longevas, adaptables a cada región. Buscamos asegurar las cosechas de grano y aumentar su área cultivable, lo que es más precoz y resistente a la sequía, de los híbridos de enero. Trabajando por ciento superiores a los comunes.

Una nueva categoría de carne superior... Con la ayuda de la agricultura perfeccionamos la crianza y engorde del ganado, con alimentaciones sustanciosas y suplementarias. Antes éramos los únicos productores del "chilled beef". Hoy competimos a sufrir la competencia en los mercados consumidores. Desplazamos a nuestros concurrentes, utilizando con mérito la técnica, nuestro suelo, y producimos el "baby beef", la nueva categoría de carne superior, todavía sin rival en el mundo. El "baby beef" es el signo del nuevo progreso de la técnica y capacidad de la ganadería argentina.

El precio de la carne compensa a productores e industriales.

Las negociaciones del Poder Ejecutivo para consolidar y aumentar los mercados de carne extranjeros, han llegado a buen término. Italia y Francia hacen nuevos pedidos. Exportaremos a Alemania una cantidad que el año pasado, el Reino Unido absorbió más de 450.000 toneladas de carne. A pesar del alto gravamen que impuso al "chilled beef" cuya carga soportó en parte el gobierno, hasta que se distribuyó equitativamente aumentado de 26 a 30 centavos por kilogramo. Ayer se ha pagado 1 centavo más. El "baby beef" vale 37 centavos.

El frigorífico de los productores...

El Poder Ejecutivo desea aprovechar esta época de prosperidad para fortalecer definitivamente esta industria. Está decidido a hacerlo. Los ganaderos necesitan intervenir en la industria y comercio de la carne sin intermediarios, con medidos y justos precios. Necesitan disponer de frigorífico razonable, instalaciones de su propiedad, y organización de su propiedad. Hemos encendido este problema y el Poder Ejecutivo está estudiando la forma de financiar esta justa aspiración.

Cumplimos por etapas una gran política. A la Junta Nacional de Carnes, a quien el gobierno confía el control de la industria, solicita su constante asesoramiento, estimula sus meditaciones. Iniciativas, sucede la Corporación Argentina de Productores, que permite al estanciero intervenir en su comercio. Vino después la entidad Mercado de Haciendas y Carnes, que hará del viejo, Luján y Avellaneda, un mercado moderno, cómodo e higiénico, y emplazará racionalmente a las frigoríficas en todo el país como la única manera de estimular y atender el consumo interno de carne, consultando la higiene y la economía. Los futuros frigoríficos nacionales serán el coronamiento de un ciclo de reformas que la nueva economía reclama. El Poder Ejecutivo...

vo los límites y ejecutarlos está firmemente decidido a perfeccionarlos y sostenerlos. Esa que en esta organización está la fuerza capaz de dominar las condiciones del mercado y la elasticidad que exige la dura competencia. Este propósito es, sin embargo, incompleto, si no aseguramos la sanidad del ganado. Los criadores argentinos están empeñados en producir la mejor carne. El Ministerio de Agricultura está decidido a garantizar al consumidor la absoluta sanidad del producto.

Reorganización del servicio sanitario...

Tenemos la satisfacción de anunciar que en breve plazo reorganizaremos nuestros servicios de inspección veterinaria en la campaña y centros industriales. No se moverá una sola libra de ganado sin que antes sea inspeccionada. Habrá tantos veterinarios regionales como fueren necesarios. Haremos profilaxis científica y práctica. En esta respuesta a un plan orgánico de mejoramiento de los productos animales para el consumo popular, como la carne y la leche. Mejoraremos la leche en los campos, para poder exigir mejor leche en la ciudad. Los legados de la Nación, la provincia, la de clonía más superior; están reunidos, preocupados en concertar un programa progresivo y práctico. En este problema el acerto tiene más valor que la celebridad.

Se creará la corporación de agricultores...

Los grandes asuntos de la ganadería no han excluido de la atención del Poder Ejecutivo los de la agricultura. Antes de 4 años el país tendrá su zona de granos por un valor de 105 millones de pesos. En materia de obras públicas realizaremos, en beneficio de los agricultores, uno de los esfuerzos más grandes de estos últimos años. Construcciones por 5 millones de pesos están ya hechas. En la cosecha de este año funcionarán 30 cargadores a gran velocidad, para que la experiencia nos señale los mejores tipos. En poco tiempo más estaremos en condiciones de considerar la adquisición de los 15 elevadores propiedad de las cooperativas locales y de la Corporación Americana de Fomento Rural, con fondos dentro del plan general a realizar este año. Pero falta de los agricultores los que ya poseen los ganaderos el organismo que les permita intervenir en la comercialización de sus propios productos. El Poder Ejecutivo quiere que los colonos argentinos tengan acceso directo al mercado internacional, que controlen por sí mismos el proceso comercial de sus frutos. Será una nueva institución de control y confianza. Esperamos someter este año al H. Congreso un proyecto de ley creando la Corporación Argentina de Agricultores, en la que todos participen abonando una cuota, pero un concurrente más. No buscamos crear privilegios en los negocios, sino factores económicos. El colono podrá siempre vender su cosecha a quien más le convenga, pero estará la institución oficial que le garantice la justicia de su operación comercial. En esta nueva empresa el Poder Ejecutivo espera encontrar el apoyo de todos los agricultores del país, y considera que así queda completada en este punto su obra reformadora.

La situación de las industrias argentinas nos dice que hemos conquistado el presente, pero nos señala, también, claramente, que debemos alcanzar el futuro. Creemos, entonces, hombres aplos para lograr esta conquista. Tenemos que transformar el concepto de que la burocracia es. Debemos hacer que fluyan a su caudal nuevos ríos vitales. Fundamos en la esperanza de los hombres que mañana dirigirán nuestra producción agropecuaria. Para eso la estamos reorganizando. Hemos nombrado una comisión honoraria que nos asesore y proyecte la ley orgánica. Necesitamos crear 50 laboratorios de experimentación, requieren un desarrollo y transformación que están alimentados por presupuestos escasos que son devueltos ampliamente por la capacidad de nuestros técnicos. En ellos está el fundamento de la ciencia y el trabajo agrícola. No es posible...

mejorar sin base científica y sin su altura poderosa; la técnica. La comisión honoraria, a quien encargamos estudiar el problema el año pasado, acaba de presentar un sólido informe, cuyas ideas concretas en un proyecto de ley. Podremos al realizar este programa fundamental.

La colonización... No hemos descuidado el problema de la colonización e inmigración. Mientras el Congreso considere el proyecto que sometimos a su consideración, estamos preparando las colonias-fiscas para recibir nuevos pobladores en condiciones propicias. Formemos en distintas zonas del país centros de atracción y asimilación de extranjeros. El nuevo director de tierras estudia un plan sistemático de orientación colonizadora e inmigratoria. Como tagonia vamos de nuestro viaje por la Patagonia en manos del estado. No hay inmigración sin propiedad de la tierra. Ya hemos comenzado a poner en movimiento esta idea. Daremos la tierra a quien la trabaje y se radique en ella.

La colaboración de los hombres de campo...

Para mejorar esta inmensa labor requiere la colaboración inteligente y permanente de todos los hombres del campo. La he reclamado muchas veces e insistiré siempre. Todo el país tiene que sentirse solidario en la obra común. Todos los problemas son importantes para el ministro de agricultura. Los 7.000 funcionarios que obedecen directamente sus órdenes no son suficientes para realizar el control, la inspección y la dirección. El aire del campo debe penetrar constantemente en sus organismos vitales. El propio ministro de agricultura ha trasladado su despacho a todos los lugares del país porque sabe que es la única manera de ver lo que no se le muestra y oír lo que no se le quiere decir.

La cooperación de gremios e instituciones... interdepende sus cada día más natural y orgánica. El Ministerio de Agricultura no resuelve ningún asunto sin someterlo a su estudio. Les ha dado participación en la solución de problemas en las instituciones que ha creado. Ha buscado las ventajas de la organización corporativa, evitando sus inconvenientes. En esta acción de gobierno, la Sociedad Rural Argentina, continuando su más ilustre tradición, ha sido un factor importante y permanente de sana y útil colaboración.

Señores ganaderos... Es la última vez que el Poder Ejecutivo actual concurre a inaugurar esta exposición. En el corto espacio de 6 años, se ha transformado la anticuada organización de las industrias argentinas y adquirido nuevo ritmo y sentido. Como siempre con vosotros las satisfacciones del presente, sin olvidar las amarguras del momento sufridas. El excelentísimo señor presidente de la Nación fue el primer obrero de la grande empresa. Fue un deber, lo realizó como un deber. La pobreza y la confianza reemplazan a la abundancia. Utilicemos con discreción los nuevos dones. Los deseamos permanentes y fecundos, fieles a la prosperidad de la República, sin olvidar que el bienestar material no es el medio, para lograr más altos propósitos, en la superación constante del esfuerzo, en la perfección de la conducta, en la perfección de la propia cultura.

Terminó su discurso el doctor Cárcano declarando oficialmente inaugurado el certamen.

Al finalizar, y en distintos pasajes, particularmente aquellos en los que anunció el estudio de la financiación del frigorífico de los productores y la creación de la corporación de agricultores, el orador fué muy aplaudido.

E-1910

昭和十二年九月廿二日

在甲谷陀

總領事 米澤 菊

外務大臣 廣田 弘毅 殿



印度ニ於ケル家畜業改善ニ關スル「ライト」博士ノ報告書  
發表ノ件

印度ニ於ケル農業及家畜業ノ改善ニ關シ帝國農事調査委員會 (Imperial Council of Agricultural Research) 活動狀況取調ノ爲メ義ニ Dr. N.C. Wright 及 Sir John Russell ノ二名カ任命セラレ右二名ハ夫々専門事項ニ付取調ヲ行ヒタルカ今回「ライト」博士ノ家畜業改善ニ關スル報告書發表セラレ

右報告書ハ同博士カ客年十一月ヨリ今年三月末迄各地ヲ巡歴シテ調査ヲ行ヒタル結果作成シタルモノニシテ其所説及勸奨ノ要旨ハ概ネ左ノ

如キモノナル趣ナリ

一、本問題ハ先ツ牛乳及同製品ノ主要生産者タル地位ニ在ル一般耕作業者側ノ立場ヨリ一層研究ノ要アリ

二、搾乳業發達ヲ期スル爲ニハ中央搾乳所ニ適當ナル職員及設備ヲ必要トス從來右ノ必要ハ認めラレ又其計畫案モ提出セラレ居タルモ財政上ノ埋田ニ依リ今日迄必要ノ資金ヲ得ルコト頗ル困難ナリキ

三、同博士ハ印度ノ乳牛産出量ヲ一ヶ年七億乃至八億「モンド」其價格約三十億留比ト見積リ居レリ

而シテ一日ノ牛乳生産量及消費量ヲ各一人當リ七乃至八「オンス」ト見積リタルカ右數字ハ英國及「デンマーク」ノ夫レニ比シ四倍ニ當ルヘシ

尙同博士ハ牛乳産出高ハ現在ノ二倍トナスヘキ必要アリト説ク

四、分配ノ問題ニ關シ印度ノ實情ニ應スル様安價ニ牛乳力得ラルル新工夫ヲナスコト必要ナル處現在一頭ノ牝牛ヨリ搾出セラルル一ヶ年ノ平均牛乳量ハ六百封度ナルカ牛乳ノ價格ヲ低廉ナラシムル第一ノ方

法ハ一頭ノ牝牛ノ乳産出量ヲ増加スルコトニ在リ此ノ目的達成ニハ現  
ニ行ハレツツアル種子牛改良ノ方法ヲ繼續スルコト必要ナリ  
五 印度ノ牛ハ一般ニ飼料ヲ受クルコト少ナキヲ以テ飼草ハ十分増加ス  
ル必要アルト共ニ牛ニ與フヘキ定糧ニ付更ニ研究スル必要在リ又缺  
食牛疫ニ對スル十分ナル調査ヲ行ヒ此ノ缺陷ヲ補フコト必要ナリ  
六 現在ノ印度搾乳業改善問題ノ内第一ノ必要事ハ「バンガローア」以  
上ノ中心地ヲ選ヒ其地ニ於テ全印度ノ家畜ニ關スル研究調査ヲ行フ  
コト之レナリ其ノ施設ハ牛乳ノ微菌學、化學的研究、搾乳ノ技術、  
獸醫學ノ四方面ヨリ考慮シテ之レヲ行フコトスル各州ノ農科大學  
ニハ家畜業ニ關スル地方的問題ヲ研究セシムル設備ヲ行フコト必要  
ナリ  
七 同博士ハ各州ニ搾乳業ノ顧問機關設置並同業發達促進ノ爲メノ官更  
任命ヲ勸奨シ居レリ  
八 印度ニ於ケル家畜業ノ發達及事業上ノ能率増進ノ爲メニハ州ト州ト  
ノ間及中央ト州トノ間ニ十分聯絡ヲ保ツコトヲ肝要トシ且現在以上

九 資金ヲ必要トス  
右報告申進ス  
本信寫送付先 孟買

E-1910

0306

主信	甲	乙	丙	丁	備考

懸案分類 E 4. 3. 2. 8

文書課長

昭和拾貳年拾月廿八日發送済

淨書

正校(原稿)

淨書

主 管 通商局長  
 任 第一課長  
 昭和拾貳年拾月廿七日 附 附屬 日附

受 信 人 名  
 農林省  
 畜産局長

名人信發  
 松島通商局長

件 名  
 印度の羊毛畜産改良委員の調査  
 報告書

名件録記  
 1-10-12 7-2-2

本件ニ關シテハ 昭和拾貳年 月 日 附連シテ 送付ス  
 號ヲ以テ 不取致シ 申進メ 置キタル 處 今般(更正)

在 九カタ 米作改良事業 ヨリ別紙寫ノ通電報アリタルニ付御着道右茲ニ送付ス  
 (本信書送付先)

公 信 案  
 (昭和拾貳年九月二十五日 附 在 九カタ 來信 第四二三號(並附屬書寫 修正通り作成 添附ノコト))

外 務 省

第三課

昭和拾貳年十月拾六日接受

東亞局  
 公普通第二一七號

昭和十二年十一月九日

在 赤 峰  
 領事代理 工 藤 敏 次

外務大臣 廣 田 弘 毅

昭和十二年十一月九日 附 在 滿 大 使 宛 公 信 普 通

第二九八號寫送附

件 名

赤峰ニ於ケル 畜産業施設ノ 擴充ニ關スル件

在赤峰日本帝國領事館

送 込

27 36

E-1910



E-1910

東亞局  
公普通第二一七號  
昭和十二年十一月九日

昭和三十二年十月十六日接受

第三課

在赤嶺  
領事代理 工藤 敏次郎

外務大臣 廣田 弘毅 殿

昭和十二年十一月九日附  
在 滿 大 使 宛 公 信 普 通  
第二九八號寫送附

件 名  
一、赤峰ニ於ケル畜産業施設ノ擴充ニ關スル件

在赤峰日本帝國領事館

發信用	執務用	
主信	/	/ 又
附 甲	/	/ 又
乙		

本信照合票挿入先

門類	項目	號
シ	ノ	ヨ

懸案 分類 E 4.3.2.8

文書課發送	昭和拾貳年拾月廿八日發送済	淨書	正校(原稿)
主 任	第一課長	昭和三十二年十月廿六日起草	
管主	通商局長	昭和三十二年拾月廿七日	附屬
通一普通	第五四四號		
受人	農林省 畜産局長	名人信發	松島通商局長
件名	印度ニ於ケル畜産業施設ノ擴充ニ關スル件	名件録記	三ノ四ノ三

文書課長



別紙

27 36

普通第二九八號

昭和十二年十一月九日

在赤峰

領事代理 工藤敏次郎

在滿洲國

特命全權大使 植田謙吉 殿

赤峰ニ於ケル畜産業施設ノ擴充ニ關スル件

赤峰ニハ既報ノ通り曩ニ産業五年計畫ニ基キ産業部國立綿羊改良場並熱河省立種畜場及同附屬畜産技術員養成所設置セラレ改良増殖業績顯著ナル處今般更ニ十一月月上旬南門外ニ生畜需給ノ調節（北滿日本移民ニ對スル耕作用牛、馬ノ供給ヲ主トス）ヲ目的トシ滿洲畜産股份有限公司赤峰出張所創設セラレ目下邦人所員四名ヲ以テ開業準備中ナル一方赤峰縣公署ニ於テハ豫テヨリ圓滑ナル畜

在赤峰日本帝國領事館

産交易ノ促進ヲ企圖シ東門外模範林東方ニ縣立家畜交易市場ヲ建設中ナリシカ十月末竣工近ク開業ノ豫定ナリ斯クテ赤峰ニ於ケル畜産施設ハ漸次擴充セラレ熱河省内斯業ノ中心地ト將來多大ノ發展ヲ期待セラレツ、アリ  
右何等御參考迄報告ス

本信寫送附先 外務大臣、奉天、錦州、承德

在赤峰日本帝國領事館

E-1910

0309